大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）大正二年九月一日發行 第一卷第十二號

近代思想

九月號

■野獸（感想）……榮（一）
■鎖工場（評論）……大杉榮（二）
■木村鷹太郎氏の心理（評論）……安成貞雄（六）
■稚い芽（小說）……佐藤綠葉（一〇）
■ひなた水（詩）……德永保之助（一三）
■虫けらの心（詩）……生方敏郎（一四）
■新刊（紹介）……寒（一五）
■或る男の影（小說）……荒畑寒村（一六）
■みんなが腹かへろ（感想）……榮（二〇）
■ある男と女郎との對話（對話）……伊庭孝（二二）
■人と超人（脚本）……堺利彦（二四）
■イグノラント（批評）……榮（三四）
■八月の雜誌（批評）……寒（三六）
■大久保より（雜錄）……榮（三八）
■讀者諸君（社告）……（三九）

近代思想社

東京府下大久保百人町三五二

Asia Library
AP
95
J2
K47
no.12

文學博士森鷗外先生序
文學博士上田敏先生序
與謝野晶子女史著
中澤弘光先生彩畫

新譯源氏物語

世界藝術史上の奇蹟たる源氏物語
大正の文壇に復活したる源氏物語

▲上卷中卷下卷二冊全四冊全譯完成▲上卷（八版）自桐壺至乙女廿一帖▲中卷（五版）自玉鬘至夕霧十八帖▲下卷の一（新刊）自御法至寄生木十帖▲下卷の二來月中旬發行自東屋至夢浮橋五帖▲鳥子紙繪卷物風極彩色金文字入ギルト附箱入頗極美裝木版極彩色奉書刷五十九葉入▲正價毎冊金三圓▲特價毎冊金二圓五十錢宛

下卷之一既成特價提供

歐洲の藝術史に未だ何等の傳ふべき作物を有せざりし十世紀に於て女詩人紫式部を絕東に出だし、其曠古の傑作小說源氏物語五十四帖が何等の因襲に羈束せらるゝ所なき純藝術家の態度より書かれ、當時の京洛に於ける貴族社會の情緒生活を描いて理想主義に走らず、偶然にも近世の謂ゆる寫實主義又は印象主義の文字と筆致を同じくせるは世界史上の奇蹟にして且つ日本文明の永久に誇りとする所也。原作は既に一千年前の古文にして甚だ讀み易からず、且つ世に註解の書あれども概ね字句を曲解して情味の眞を傳へず。曩きに與謝野晶子女史が前人の未だ企てざりし所に向て筆を著け、多年の刻苦を經て新譯源氏物語二卷を公にせらるゝや世の識者皆な譯者其人を得たるを稱揚せり。平安朝の文學と歷史に精通し併せて當時の情緒氣分に尖銳なる直觀力を有する女史を待つて初めて能くせらるゝ一事業なれば也。女史近く歐洲より歸つて更に新譯の稿を繼ぎ、玆に下卷二冊を大成して全譯を完成せられたり。今や『源氏物語』は現代の紫式部たる晶子女史に由て何人にも平易に鑑賞され得べき現代語の傑作小說となれり。加ふるに中澤書伯の挿畫五十四葉は悉く木版奉書刷極彩色にして、內容と相映じて華麗凄艶とりどりの趣を盡して平安大正の兩期に於ける二才女の合作を飾りつゝあり。

■發兌元 東京麴町區平河町五丁目五番地（電話番町二〇九三番）（振替東京三八一七番）金尾文淵堂

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

213-442254

第一巻第十二號

野獸

また、向う側の監房で、荒れ狂ふ音がする、
怒鳴り聲がする、歌を唱ふ、
壁板を叩いて騒ぎ立てる。
それでも役人は、知らん顔をしてほうつて置く。

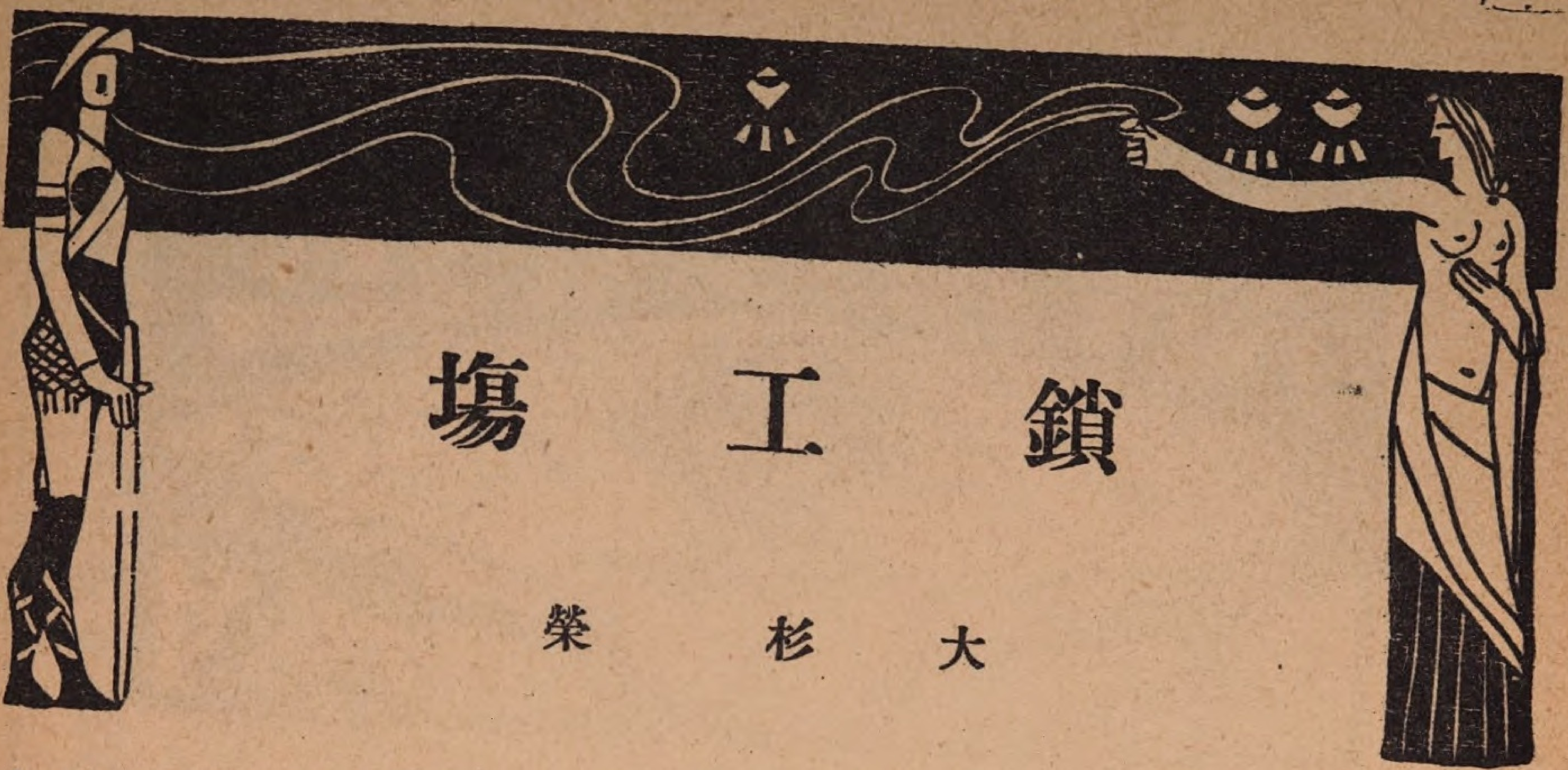
いくど減食を食つても、
暗室に閉ぢこめられても、
鎖りづけにされても、
やつぱり依然として騒ぎ出すので、
役人ももう何んとも手のつけやうがなくなつたのだ。

まるで氣ちがひだ、野獸だ。

だが俺は、この氣ちがひ、この野獸が、羨ましくつて仕
方がない。
さうだ!!、俺は、もつともつと馬鹿になる、修業をつま
なければならぬ。

—榮—

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



鎖工場

大杉榮

一

夜なかに、ふと目をさましてみると、俺は妙な所にゐた。

目のとゞく限り、無數の人間がうぢやうぢやゐて、皆んなてんでに何にか仕事をしてゐる。鎖を造つてゐるんだ。

俺のすぐ傍にゐる奴が、可なり長く延びた鎖を、自分のからだに一とまき巻きつけて、その端を隣りの奴に渡した。隣りの奴は、又これを長く延ばして、自分のからだに一とまき巻きつけて、その端を更に向うの隣りの奴に渡した。その間に始めの奴は、横の奴から鎖を受取つて、前と同じやうにそれを延ばして、自分のからだに巻きつけて、又その反對の横の方の奴にその端を渡してゐる。皆んなして、こんな風に、同じ事を繰返し繰返して、しかも、それが目まぐるしい程の早さで行はれてゐるのだ。

もう皆んな、十重にも二十重にも、からだ中を鎖に巻きつけてゐて、はた目からは身動きも出來ぬやうに思はれるのだが、鎖を造る事とそれをからだに巻きつける事だけには、手足も自由に動くやうだ。せつせとやつてゐる。皆んなの顔には何んの苦もなささうだ。むしろ喜んでやつてゐるやうにも見える。

しかしそうばかりでもないやうだ。俺のゐる所から十人ばかり向うの奴が、何にか大きな聲を出して、その鎖の端をほうり投げた。するとその傍に、やつぱりからだ中鎖を巻きつけて立てゐた奴が、づかづかと其奴の所へ行つて、持つてゐた太い棍棒で、三ツ四ツ毆りつけた。近くにゐた皆んなはときの聲をあげて、喜び叫んだ。前の奴は泣きながら又鎖の端を拾ひ取つて、小さい輪を造つては嵌め、造つては嵌めしてゐる。そしていつの間にか、其奴の涙も乾いて了つた。

又所々には、やつぱりからだ中鎖を巻きつけた、しかし皆んなに較べると多少風采のいゝ奴が立つてゐて、何んだか蓄音器のやうな黄色な聲を出して、のべつにしやべり立てゝゐる。『鎖は吾々を保護し、吾々を自由にする神聖なるものである。』といふやうな意味の事を、難しい言葉や難しい理窟をならべて、述べ立てゝゐる。皆んなは感心したやうな風で聽いてゐる。

そしてこの廣い野原のやうな工場の眞ん中に、すばらしい立派なりをした、多分

はこの工場の主人一族とも思はれる奴等が、ソファの上に横になつて、葉巻か何にかくゆらしてゐる。その烟の輪が、時々職工共の顔の前に、ふわりふわりと飛んで來て、あたりの皆んなをいやと云ふ程むせさせる。

二

妙な所だなあと思つてゐると、何んだか俺のからだの節々が痛み出して來た。氣をつけて見ると、俺のからだにもやつぱり、十重二十重にも鎖が巻きつけてある。そして俺もやつぱりせつせと鎖の環をつないでゐるのであつた。俺もやつぱりこの工場の職工の一人なのであつた。

俺は俺自身を呪つた、悲んだ、そして憤つた。俺はヘーゲルの言葉を思ひ出した。

『現實する者の一切は道理ある者である。道理ある者の一切は現實する者である。』

キリアム第三世及びその忠良なる臣下は、この言葉を以て、當時の専制政府、警察國家、封印狀裁判、言論壓迫等の有りのまゝの一切の政治的事實に、哲學的祝聖を與へたものであると解釋したさうだ。

政治的事實ばかりではない。總てがさうなのだ。あの愚鈍なる普魯西人民に取つては、あの一切の現實が、たしかに必然の、そして道理あるものであつたのだ。

俺自ら俺の鎖を鑄、且つ俺自ら俺を縛つてゐる間、到底、此の現實は、必然である、道理である、因果である。

俺はもう俺の鎖を鑄る事をやめねばならぬ。俺自ら俺を縛る事をやめねばならぬ。俺を縛つてゐる鎖を解き破らなければならぬ。そして俺は、新しい自己を築き上げて、新しい現實、新しい道理、新しい因果を創造しなければならぬ。

俺の腦髓を巻きつけてゐた鎖は、思つたよりも容易に、大がい解けた。しかし俺の手足の鎖は、頑固に肉の中にまで、時としては骨の中にまで喰ひ込んでゐて、ちよつと觸つたばかりでも痛くつて仕方がない。それでも我慢しいしい少しは解いた。そして後には、その痛いのが、多少小氣味のいゝ感じさへ添へて來た。見張りの奴の棍棒も、三つや四つ位なら、平氣で受ける程になつた。傍の奴等の嘲笑や罵詈は、こつちから喜んで買つてやりたい程になつた。

けれども俺ひとり俺の鎖を解かうとしても、どうしても解けない鎖が澤山ある。俺の鎖と皆んなの鎖とは、巧みにもつれ合ひつなぎ合つてゐる。どうにも仕方がない。それに少しでも怠けてゐると、折角苦心して解いた鎖が、自然と又俺のからだに巻きついてゐる。知らぬ間に俺の手は、又俺の環をつなぎ合はしてゐる。

工場の主人の奴は、俺達の胃の腑の鍵を握つてゐて、その鍵のまはし具合で、俺達の手足を動かしてゐるのだ。今まで俺は、俺の腦髓が俺の手足を動かすものだとばかり思つてゐたが、それは大間違だつた。見渡す所、何奴の手足だつて、自分の腦髓で左右せられてゐるものはない。皆んな、自分達の胃の腑の鍵を握つてゐる奴の腦髓で、自由自在に働かされてゐるのだ。隨分馬鹿氣きつた話だが、事實は何んとも仕方がない。

三

そこで俺は、俺の胃の腑の鍵を、其奴の手から取りもどさうと思つた。しかしこゝでも又、俺ひとりの胃の腑の鍵を、其奴から奪ひとる事は、とても出來ない仕事であつた。俺の胃の腑の鍵と皆んなの胃の腑の鍵とが、其奴の手の中で、やつぱり巧みに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

もつれ合ひ結び合つてゐて、どうしても俺ひとりのだけを抜き取る譯に行かない。

又其奴のまはりには、いろんな番人がゐやがる。皆んな鎖をからだ中に卷きつけて、槍だの弓だのを持つて立つてゐる。恐くつて寄りつけるものでない。

俺は殆んど失望した。そして俺のまはりの奴等を見た。

鎖で縛られてゐる事も知らんでゐるやうな奴が大勢ゐる。よし知つてゐても、それが有りがたいものだと思つてゐる奴も大勢ゐる。有りがたいとまでは思はないが、仕方がないと諦めて、やつぱりせつせと鎖を造つてゐる奴も大勢ゐる。鎖を造る事も馬鹿らしくなつて、見張りのすきを窺つてはちよいちよい手を休めて、自分の頭の中で勝手氣儘な空想妄想を書きながら、俺は鎖に縛られてゐるのではない、俺は自由の人間だ、などゝ熱にうかされてたわ言を云つてゐる奴も大勢ゐる。馬鹿々々しくつて、とても見てゐられたものでない。

急に俺は目を見張つた。俺は俺の仲間らしい奴等を見つけたのだ。

人の數も少ない。且つあちこちに散らばつてゐる。しかし此奴等は皆んな、主人の手の中にある、皆んなの胃の腑の鍵ばかりを狙つてゐるやうだ。そして俺と同じやうに、自分等ばかりの鍵を奪ひとる事はとても出來ないと觀念してか、しきりと近所の奴等にさゝやいて、團結を説いてゐる。

『主人の數は少ない。俺達の數は多い。多勢に無勢だ。俺達が皆んな一緒になつて行けば、一撃の下に、あの鍵を奪ひ返す事が出來る。』

『しかし正義と平和とを主張する俺達は、暴力は愼まなければならぬ。平和の手段で行かなければならぬ。しかもそれで容易くやれる方法があるんだ。』

『俺達は毎年一度、俺達の代表者を主人の所へ出して、俺達の生活の萬事萬端をきめてゐる。今でこそ、あの會議に列なる奴等は皆んな主人側の代表者だが、これからは俺達の方の本當の代表者を出す事に勉めて、あの會議の多數黨となつて、そうして俺達の思ふまゝに議決をすればいゝんだ。』

『皆んなは默つて鎖を造つてゐればいゝ。鎖をまきつけてゐればいゝ。そしてたゞ、數年目に來る代表者選擧の時に、俺達の方の代表者に投票をすればいゝんだ。』

『俺達の代表者は、だん〴〵俺達の鎖をゆるめて呉れると同時に、最後に、俺達胃の腑の鍵を主人の手から奪ひ取つて了ふ。そして俺達は、この鍵を俺達の代表者の手にあづけたまゝ、俺達の理想する新しい組織、新しい制度の工場にはいるんだ。』

四

俺は一應、尤もな議論だとも思つた。しかしたゞその數をたのみにしてゐる所、又自分よりも他人をたのみにしてゐる所などが、どうも氣に食はない。そして其奴等が科學的だとか云つてゐるその哲學を聽くに及んで、此奴等もやつぱり俺の仲間ではないと覺つた。

此奴等は恐ろしい Panlogistsだ。そして恐ろしい機械的定命論者だ。自分等の理想してゐる新しい工場組織が、經濟的行程の必然の結果として、今の工場組織の自然の後繼者として現はれるものだと信じてゐる。從つて奴等は、たゞこの經濟的行程に從つて、工場の制度や組織を變へればいゝものと信じてゐる。

尤もどつちかと云へば俺も Panlogistだ。機械的定命論者だ。けれども俺の論理の中には、俺の機械的定命の中には、大ぶい

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ろんな未知數が入つてゐる。俺の理想の實現は、この未知數の判然しない間、必然ではない。たゞ多少の可能性を帶びた蓋然である。俺達は奴等のやうに將來の樂觀は出來ない。そして將來に對する俺の悲觀は、現在に於ける俺の努力を勵まさしめるのだ。

　俺の所謂未知數の大部分は人間そのものである。生の發展そのものである。生の能力そのものである。更に詳しく云へば、自我の能力、自我の權威を自覺して、その飽く所なき發展の爲めに鬪ふ、努力そのものである。

　經濟的行程が、俺達の工場の將來を决する、一大動力である事は疑はない。けれどもその行程の結果として、如何なる組織と制度とを齎すべきかは、かの未知數、即ち俺達の能力と努力とに係るものである。組織と云ひ制度と云ふ、それは人間と人間との接觸を具體化したものに過ぎない。人間と人間との關係を具體化したものに過ぎない。零と零との接觸、零と零との關係は、如何樣にしても、要するに零である。

　けれども俺は、今日既に出來てゐる組織や制度に對しては、その殆んど萬能とも云ふべき大勢力を、慄然として怖れざるを得ない。その破壊を外にして個人の完成を稱ふるが如き奴等は、夢の中に夢見る奴等である。

　なまけ者に飛躍はない。なまけ者は歴史を創らない。

五

　俺は再び俺のまはりを見た。

　殆んどなまけ者ばかりだ。鎖を造る事と、それを自分のからだに卷きつける事だけには、即ち他人の腦髓によつて左右せられる事だけには、せつせと働いてゐるが、自分の腦髓によつて自分を働かしてゐるものは、殆んど皆無である。こんな奴等をいくら大勢集めたつて、何んの飛躍が出來やう、何んの創造が出來やう。

　俺はもう衆愚には絶望した。

　俺の希望は、たゞ俺の上にかゝつた。自我の能力と權威とを自覺し、多少の自己革命を經、更に自己擴大の爲めに奮鬪努力する、極小の少數者の上にのみかゝつた。

　俺達は、俺達の胃の腑の鍵を握つてゐる奴に向つて、其奴等の意のまゝに出來上つたこの工場の組織や制度に向つて、野獸のやうに打つゝかつて行かなければならぬ。

　俺達は、恐らくは最後まで、極小の少數者かも知れぬ。けれども俺達には發意がある、努力がある。そしてこの努力から生じた活動の經驗がある。活動の經驗から生じた理想がある。俺達は飽くまでも戰鬪する。

　戰鬪は自我の能力の演習である。自我の權威の試金石である。俺達の圈内に、漸々になまけ者を引寄せて、其奴等を戰士に化せしめる磁鐵である。

　そしてこの戰鬪は俺達の間の生活の中に、新しき意義と新しき力とを生ぜしめて、俺達の建設しやうとする新しい工場の芽を萠ましめるのである。

　あゝ、俺はあんまり理窟を云ひすぎた。理窟は鎖を解かない。理窟は胃の腑の鍵を奪ひ返さない。

　鎖は益々きつく俺達をしめて來た。胃の腑の鍵も、益々かたくしまつて來た。さすがのなまけ者の衆愚も、そろそろ悶え出して來た。自覺せる戰鬪的少數者の努力は今だ。俺は俺の手足に卷きついてゐる鎖を棄てゝ立つた。

　俺は目をさました。とうに夜も明けて、八月なかばの朝日が、俺のねぼけ面を照りつけてゐる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

木村鷹太郎氏の心理

安成貞雄

一

A君、先頃は、木村鷹太郎氏著『大日本古代小史』に關する意見を徴せられたが、例のなまけ癖が出て返事がおくれて相すまぬ。あれに就いては、多少云つて見たい事もあるので、こゝで公開する。

一口に云へば、あれは愚書だ。晝寢の伽に讀んで笑ふには、大變いゝ本だが、眞面目な歴史としては、一文の價値もない。君は、日本の歴史家側から、あの書に對する批評反駁が出ないのを見て、あの書に幾分の取るべき所があるのだらう位には思つて居るやうだが、それはとんだ勘違ひだ。

松本道別氏が、黒板勝美博士に、『あれをやつゝけたらどうです』と云つたら、黒板博士が笑つて、『觸らぬ神に祟りなしだ』と云つた相だ。此の話は、又聞きだから、眞僞は保證されないが、しかし、是れは、あの書に對する歴史家一部の態度を代表して居るものである。

一体日本の歴史家は、あの古代小史を一種の標準として、二つに分けられる。一つは、日本古代史は勿論、埃及、希臘、ローマの古代史に通じて居つて、木村氏の古代史を論破する位は雑作なく出來る人、も一つは其智識が、古事記か、せい〴〵東洋古代史の、それも訓詁註釋に限られて居つて、埃及、希臘、ローマの事となると、まるつきり知らない人、此の二つに分けられる。前の人は馬鹿々々しいから相手にならない。後の人は、何んとか論じて見たいのだが、木村氏が、希臘兜を蒙り、比較言語學の(?)槍を提げてあばれまわるのだから、手が出せない。例へて云つて見れば、盲の狂人が、糞柄杓を振廻して、白晝銀座街頭を暴れまわる様なものだ。武道の奥妙を極めたものは、君子危きに近よらずで、鼻をつまんで、よけて通す。生兵法を心得たものは、いで取つて押へて手柄にしやうと思ふが、糞柄杓（云ふ迄もなく希臘語だ）が恐いので、手向ひが出來ない。盲の狂人は、相手になるものがないから、自分免許の天狗になつて、吾こそは、日本一の劍術使だと思ひ昂る。するとまた、見物の内には、劍術の劍の字も知らぬ奴が居つて、成る程傑いと囃し立てる。中には、わざ〳〵入門して、小さな糞柄杓を振り廻す奴も出て來る。盲狂人先生は益々自ら傑くなつて仕舞ふ。

斯う云ふわけだ。君は、あまりひどいと云ふかも知らないが、實際此の通りだ。但し、本當に武道の奥妙を極めたものは、極く僅少だ。一寸見れば、武道の奥妙を極めた様でもあり、世間も、恐らく本人もさう考へて居つて、其實さうでない人が隨分ある。文學博士白鳥庫吉氏などは、正しく其一人である。君は、或は僕の言ふ事を信じないかも知れないが、手許にあるなら、八月の中央公論の『日本民族論』を讀んで見たまへ。是れが、歴史で博士になつた人の議論かと思ふと、博士には誰れでもなれると思ふに相違ない。

生兵法連に至つては、天下滔々として然りだ。僕が最近讀んだのでは、『我等の祖先』の著者、文學士中村德五郎氏などは、その隨一人だ。此の人などは、千九百十三年の今日、『人猿同祖』と云

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ふ事實をまだ知らずに居る人だ。そして、日本人だけは、進化の法則以外に超然として、全く神（日本の神は西洋の神と違ふ事をくど〳〵と辨じて居る）から出たもの、神の後裔だと信じて居る。『天之御中主神は、高御産巣日神、神産巣日神は又實に吾等日本民族の高祖にして、就中天之御中主神は、其の神名の示すが如く、一天萬乘の主宰、國土の創造者』だと云つて居る。君と雖も呆れるだらう。其癖此の人は、日本人とは何んだと云ふ事は、一向說明して居ない、無論出來ないのだ。

近頃『神代の研究』と云ふものを著はした福田芳之助氏なども、同じく此の滔々組だ。此の人は、古朝鮮の歷史に通曉して居り、別著『新羅史』の如きは、有益なものであるが、矢張り、滔々組を脫し得ない。此の人は、（中村氏も同樣であるが）神話、傳說に關する科學的智識が少しもない。それで、日本神話中の神と、新羅の神とを共に史上實在の人物として、其考證に骨を折つて居る。氣の毒なわけだ。

久米邦武翁なども、此の滔々組の一人だ。其外、古事記、日本記一點張の連中などは、皆な此の仲間だ。

見物、弟子入連は案外少ない。是れは、一つは、現在食へるか食へないかゞ問題な世の中だから、日本人の祖先が、猿だらうが、朝鮮のヨボの分れだらうが、馬來人だらうが、將又埃及人だらうが、御勝手なのであらう。是れがまた、御有難には頭痛の種なので。『我等の祖先は』神なりと絕叫して以つて、『物質文明に溺れたる』國民を覺醒させやうと云ふ事にもなるのであらうが、兎に角、少ない。しかし、段々殖えて來る。古河市兵衛と云ふ親爺は、人間の成功するのは、運、鈍、根の三つだと云つたが、木村鷹太郎氏の如きは、正しく其根で成功しかけて居る。何しろ長年希臘語と云ふ糞柄杓を振廻して居る事ではあり、其振り廻し方の秘訣とも云ふべき大部の書が出るのだから、世間の有象無象は、糞が、金色に見え出して來るものらしい、それで慾の皮のはつた奴が入門するのだ。中には狂人と云ふものは、人間並以上の糞力が出るものだとも知らないで、どうもあの精力がえらいなどゝ感服するのもある。A君、君の愛讀する『新佛教』の新刊批評掛などは此の先頭だ。君も大方『新佛教』の新刊批評にかぶれたのだらう。あの批評子先生は、希臘語、比較言語學などに威かされて、へんな事を言ふ樣になつたのだ。初步にしろ、比較言語學を嚙つて居る君が、あれにかぶれて了ふとは何んの事だ。

二

一体、古代史の研究は、基礎を、人類學人種學に置かなければならぬものだ。其メソドも相應に立つて居る。其メソドの一つとしての比較言語學だつて、木村先生の樣なものではない。且つ、民族の異同を決定するに、言語のみによる事の危險な事は、君も知つて居る通りだ。

『木村先生だつて、それ位の事は心得て居るだらう、然るに、何故あんな言を立てる樣になつたのだらう』是れは、君が當然抱く疑問に相違ない。所が、木村先生は、『それ位の事』も知らないのだ。そして、『あんな說』を立てた理由は外にある。是れが、僕の云つて見たい所なのだ。

抑も木村氏が、『世界的研究に基ける日本太古史』二卷と『日本の使命世界の統一日本太古史』一卷とに於いて、極力說明し、主

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

張したのは何んであるか。答は、本の卷に現はれて居る、日本は世界を統一すべき使命を帯びて居ると云ふ事なのだ。

遺傳によるか、境遇によるか、それとも教育によるか、兎に角、木村氏は、世界を統一したくつて堪らないのだ。それで、どうかして、統一する口實（世界を統一するには口實が入用な事は、君の知る通りだ。）を見付けたいとあせつて居る間に、木村氏は、日本が、自ら稱してスベラ御國と云つて來た事を發見した。然るに、其スベル國土は、甚だ狭くつて『世界に立つてスベラ御國と稱し得ざる』事を發見した。

木村氏に從へば、スベラ御國たるものは、世界最古の文明國でなければならないのに、舊史家の説明に從へば、日本は其文明を支那朝鮮から學び、建國の歴史は僅か二千五百年、之れをアッシリア、バビロニア、埃及に比べて『白髪眉壽の老成人の前に立てる襁褓中の赤兒たるの觀』がある。そこで、木村氏は、日本がスベラ御國たる理由は外にあるに相違ないと考へた。所が幸ひにも前年プラトー全集を飜譯した時、一寸噛つて置いた希臘語が、三年經てば禍も何んとやらで、御役に立つ事となつた。木村氏は先づ獨立的研究に基いて比較言語學系統を立て、『スベラは羅甸語の Supera と同一語なるべく』考へた。此の新發見に徴して、自家の新比較言語學系統の正確なるを信じた木村氏は、更に研究の歩を進めて、日本がスベラ御國にして、世界統一の使命を有すと云ふ口實を發見せんと努力した。結果は、木村氏に取つて徒爾でなかつた。氏は遂に、比較神話、國典地理の研究等の世界的研究によつて、『日本祖先の神々は世界人類——少なくとも文明人種の祖先なること』『日本太古の版圖は世界的に大なりしこと』等、七ヶ條の大發見をなした。而して、『ヤマト』は即ち救濟を意味せる語で、日本民族は、其『高尙なる目的を有する』ものであると云ふ確信に達した。

三卷の日本太古氏は、實に此の確信の證明である。

木村氏は、三卷の證明書を作つて、ホッと安心した。日本は立派に世界を統一する口實を得た。全世界の歴史家が、擧つて反對しても、此の口實の陰に潛む史的事實を動かし得ないと考へて、安堵した。

日本人は、アーメニア（高天原）から下り、先づアフリカの西端セネガルに至り、次いで、東に向つて埃及、メソポタミア、ペルシア、印度及び支那を經て、極東日本に到達する底の大發展をなしとげた。埃及の三角塔も、スフインクスも、バビロニア、アッシリアのエデンの樂園も、バベルの高塔も、印度の大伽藍も、皆日本人が作り、若しくは日本人から傳へた文明が作つたものではないか？西洋文明の源泉と稱せらるゝ希臘、ローマ（クリートには行かなかつたと見える）の文明も日本人の作つたものではないか？耶蘇も、釋迦も、マホメツトも、皆日本人であり、若しくは日本人の思想を盗んで我は顔に弘めたものではないか？斯う思ふて、木村氏は、日本に生れた事の光榮と誇りとをしみ〴〵と感じた。

A君、木村氏は、其光榮と、誇りとをば、三卷の太古史中に、詳細反覆して居る。そして、日本は過去にあつたが故に、過去にあつた如く、（もつと過去まで行けば、類人猿あたりまで行かなければならぬが、其程度は説いてない）世界を統一すべしと主張して居る。併しながら、木村氏は、其統一の手段を説く事、過去の統一を説く如く鮮かに、美事に、大膽ではなかつた。是れは外で

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

もない。眼の前の事實が然らしめたのだ、木村氏は、過去に關しては、一切の歴史家を叩き付けたが、眼の前の事實を如何ともし得ないのである。木村氏に云はせると、スペラ御國でもなんでもない露國が北に控へて居る。前年叩き付けた支那さへ、日本のまゝにならぬ。況んや、英、獨、佛をや。是れをどうして統一したらよからう。木村氏の心情を察するに、腸爲めに九回するものがあつたらう。鑿柄枘を振舞はしたのも自棄からである。

三

Ａ君。中村文學士にしても、其他の所謂日本史家にしても、日本の建國に關しては、木村氏と截然異なつた說を以つて居るが、日本がスペラ御國たり、世界統一の使命を有するものたりとするに於いては、決して木村氏と異はないのである。而して、世界統一の手段に苦しむ點に於いても、木村氏と同一である。そこで此等の人々は、極力日本の過去を讚美して、其眼前の如何ともすべからざる事實を忘れんと試みる。不幸にして、此の人達には、希臘語がわからないから、其讚美すべき日本の版圖を東海の一粟たる此の島に限つた。けれども、木村氏は、バイロン渴仰の詩人であり、希臘語、羅甸語に通じた學者である。故によく、日本をして過去に於いて世界を統一せしめた。第一、過去に於いて統一せしめるのであるから、他の國と戰爭せずにすむ。即ち、極めて安價に統一が出來る。木村氏ともあらう者が、日本をして、安價な統一に滿足せしむるのは怪しからん次第であるが、目下の處是れより外仕方がない。是によつて其のヂンゴイズムを滿足させなければならぬのである。

Ａ君。かう考へて來れば、木村氏が、其世界統一の野心を滿足させやうとして、忽ち眼前の事實の壁に突きあたり、其越え難いのを見て、統一を過去に求めた心理が明かになるであらう。實に『眼前の事實』が、氏の副意識に巢を食ふて、氏をして過去を追はしめたのである。此の點に於いて、氏は、社會生活と稱する眼前の事實から逃避して藝術に隱れる文學者と同じである。而して氏は實に偉大なる藝術家である。

Ａ君。昔、德川家光の時代（極東日本になつてからの事である）に大久保彥左衞門と云ふ老人が居つたと云ふ事實がある。此の老人は、若い者の顏を見ると、十六才とかに鳶之巢山で一番乘をしたと云ふ手柄話をして聞かせた。そして其話をし出してから、長くは生きなかつた。Ａ君、僕は日本魂が、もう長い事がないのぢやないかと思つて心配して居る。ビク／＼して居る。なくなつたら、我々日本人は、どうしたらいゝだらう。思ふてこれを考へる毎に、木村氏は日本人の祖先が、あの豐饒なナイル河畔の地と其文明と、また氣候の溫和な希臘、伊太利と其文明と、チグリス、ユーフラテスの河畔と其文明とを全く捨て去つて、こんなケチな國へ來たのを憤慨して居るに相違ない。

Yotaの長談議、是れで失禮。

武俠世界の九月號に、磔川山人と云ふ人の、『大逆事件の眞相』とか何んとか題する名文がある。忘れッぽいこの日本の人間めらに、折々かう云ふ事を思ひ出さしてくれるのは有りがたい。（栄）

稚い芽

佐藤緑葉

あらゆる物の運動が不意に停まつたやうに思はれた。私はじつと耳を澄まして、更けゆく夜の底から何ものかの音をきゝとらうと思つた。

地球は今その活動をやめたのであらうか、深くこの世を被ふてゐる闇の底からは、輕い羽毛の風に乘つてたゞよふほどの氣はひもきこえなかつた。眼を閉ぢると、自分の坐つてゐる家は限りなく下へ下へと落ちて行くやうに思はれる。

私は病兒の瘦せた手をそつと握つて見た。それは鑛物にでも觸れるやうに冷たかつた。枕許の時計をとつて脈搏を數へて見ると、忙がしくセコンドの音を追ひこして、一分間に百五十の上を搏つのであつた。それでも耳をずつと鼻腔の處へ持つてゆくと、微かに呼吸をつゞけてゐるのがきゝとれた。

『どんな事があつたつて、稚い芽は伸びる權利があるんだ。』

私は强て幾度もこんなことを考へた。けれどもそのすぐあとから、ひいて行く潮のやうな力が、この弱い病兒の生命を奪はうとしてゐるかのやうに思はれてならなかつた。力の盡きた獨樂が次第にその首を振つて止まらうとしてゐるやうに、病兒も一刻一刻に吸ふ息が弱つて行くのではあるまいか……

電燈は靑い蚊帳の外に老人のやうな光を放つてゐた。その光もだん／＼淡くなつて行くやうに思はれた。もしか消えはしないだらうか、ぽつかり消えた時は！　かう思つて私は身体の戰慄を覺えた。

いろんな不祥な考へが頭の中に渦のやうに湧きかへつた。朝來た物を言はない眞白な乞食婆……　……闇の中を默つて彼方へ歩いてゆく病兒の薄い影…………一番近い關係のものにのみ見えるといふ靑い人魂…………

逃げてゆくものを遮りとゞめようとして、私は思はず空に手をひろげようとした。

直接に顏に當る光をさけるために、電燈の球には薄い紗の被ひが懸けてあつた。その被ひを透し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

て蚊帳の中に忍びこんでくる微かな光にすかして見ると、病兒は白眼を半ばあらはして眠つてゐるのであつた。その晩までは一寸指の尖にさはつても眼をさましたのだが、もうこの夜は体温計を腋の下に挿してやつても昏々として眠つてゐた。

病兒の向うには、疲れた人が小さくなつて横つてゐた。その樣子は眠れない眼を、無理に膠か糊でゞも閉ぢつけられたやうであつた。眼の下と頬の肉がすつかりこけて、投げ出した手足は日に乾した大根を見るやうであつた。

私の頭は眠つてゐるこの二つのものに曳きずられるやうであつた。じつと眼をあいてゐるつもりでも、いつの間にか二つの眼瞼は眞中で出あうてゐるのであつた。強て瞳を見はつてゐても、そこに何物の象も映らない事があつた。

私には總てのものがこの世から消えて行つたやうに思はれた。眼の前に擴がつてゐるものは、たゞ單調なうつろな空間ばかりで、眼に見えない黒い喪がその邊にふはり〳〵と漂うてゐるやうであつた。

『僕だけは起きてゐなくては……………』

私は幾度かかう思つて心を勵ました。併し幾晩もつゞけた徹夜のためにすつかり頭は萎えて了つて、腦の內側はもう紅くでもたゞれてゐるのか反射能力を持つてゐなかつた。

ふと氣がつくと、病室が全体小蒸汽のやうに搖れてゐるやうであつた。私は電燈の傘に眼をやつた。併し電燈は少しも動いてはゐなかつた。そこで今度は蚊帳の外の障子の方を見ると、その骨が悉くゆがんで、今にも倒れかゝりさうに思はれた。

私は勝手へ出て行つて顏を洗つた。そして序に氷嚢をかへようと思つて氷を砕いた。

カン、カン、といふ音が、自分ながら喫驚するほど高く鼓膜に衝き當つた。小さな氷の砕ける音は、この家ばかりでなく、すべての空間を最も高く支配する響のやうに思はれた。

私は砕いた氷で二つの氷嚢を一ぱいに滿たした。そして燃えるやうに熱の高い額と、太鼓の皮のやうに狂氣めいて躍つてゐる心臟の上にあてゝやつた。

單調な時は、靜かに、極めてゆつくりと其の足

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

を運んで行くやうであつた。その靜かな時の流れて行くのが私には堪へられなかつた。じつと無言のまゝ眼を見張つてゐると、頭の中はだん／＼熱を持つて暑くなつてくるやうであつた。そして時々その暑い鎔爐のなかへ、脊髓の方から氷のやうな寒い風が襲うてくるのであつた。

私は何年かの前、或る海岸で迎へた明方を思ひ出した。その時も私は矢張重い病人の枕許についてゐたのであつた。その病人は迫つて來た死の爲に毎晩眠る事が出來なかつた。

「あゝ、早く夜があけるといゝなア。」

夜が更けて、重くるしい沈默が地上に滿ちわたる時、いつも病人はかう云つて單調な『時』の早く過ぎて行くのを祈るのであつた。それで日の光が少しでも闇の中に見え出すと、病人は嬉しさうに雨戸をあけさせて、じつと外の方を眺めやるのであつた。

その頃は毎日陰氣な雨が降りつゞいた。窓から病室に流れ込む空氣も肌にひいやりと濕(しめ)つぽかつた。その時の病人は、とう／＼夏の明方の三時頃に呼吸(いき)を引きとつて了つた。

それから後、あけ方は私のおそろしいものゝ一つになつた。夜の終りがこの世を引き拂ふ時、その黑い裳に人間の魂を盜んで行くやうにさへ思はれた。

併し單調な夜は容易にこの世から引き去らうとしなかつた。大きな空間の四方を、強いニスでゞも塗りかためたやうに、この家をめぐる空氣の微動する氣はひさへもきこえなかつた。

病兒はいつまでも昏々と眠つてゐた。或る大きな力の前にある小羊のやうに、生存の權利を主張する事もなく、又死の近づいてゐるといふ事をも知らなかつた。そして小さな木乃伊のやうに力なく橫はつてゐるのであつた。

『稚い芽は伸びる權利があるんだ！』

私はかういふ考へを何處までも繰りかへした。それと共に一層不安の念はまさるのであつた。

不意に私の疲れた頭は、高い物音で呼びさまされた。それはこの靜かな大きな谷の底をゆるがすやうに、窓の外にある水道の水のほとばしるのであつた。誰か水を汲みに來たのである。さはやかな水のバケツの底にはねかへる音は、一晩眠らなかつた頭に痛いやうに響いて來た。

私は蚊帳の外に出て、高窓の戸をほそ目にあけて見た。成程夜は今漸く明け放れるところであつた。隣りの屋根や、少し離れた松の樹立などには、まだ湯氣のやうな靄がひつたりと吸ひついてゐた。

私は再び蚊帳の中へ身體を入れた。そして病兒の口許へ耳をそつと持つて行つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ひなた水

徳永保之助

わたしといふもの丶生ぬるいこと!
若しつッ込めるもんなら、
ちよッと手を入れてごらんなさい、
まるでひなた水です。

わたしは熱くもなれず、冷たくもなれないので
困ります。

考へて見れば

(ひッ込んで考へれば、)
俺はまつたく自由だヨ、
兩親も無し、きやうだいも無し、妻も無し、子
も無しサ、
たとへどんな事をしようと、——
死なうとも、生きてゐようとも、——
(ひッ込んで考へれば、)
まつたく自由だヨ。

Undesirable Man.

自分の事、
それに關聯して、
世の中の他人の事、
考へねばならぬことが、
とりちらされた、ぶざまな古道具のやうに、
俺の周圍にごろ〳〵横つてゐる。

俺はどうすることも出來ぬ、
たゞその中に、
(俺は病人だ。)
終日ねむりつゞけて、
熱とおそろしい夢にうなされてゐる。

さてこのまんまなら、
つまりは俺は、
世の中のUndesirable Manか。——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

虫けらの心

——大杉兄へ——

生方敏郎

■

あはれ、このむだ花の蜜をあさる
虫けらの徒の存在を許せ。

頼みもせぬに自然は我等虫けらを生んだ。
大きい鳥の堅い嘴で、マゴ〳〵すりやつッ突か
れる。
こりや大變と命から〴〵、
するとまた、
醜い獣に睨めつけられる。

虫けらにむだ花無くて何とせう。
昨日も今日もむだ花の上に、
そしてまた明日も。

私達は唯誘惑を糧として生きてるんだ。

■

お前が京都雛の天神様みたいな髯をして、俺の前
へヒヨコリ顔を出した時、
誰がお前を理窟の虫、喧ましい虫、退治る虫、向
脛かつ拂ひ虫と思はうぞ。

けれどむだ花の虫けらには、物凄い理屈の虫が面
白い様に思はれた。だから其後に喰付いて家を
出たのだ。
驚いた、俺の近所にも理窟の虫が澤山ゐやがつた。
俺はあんな理窟を聞いてると眼まひがして來る。
女の味を語れ、果物の香を語れ、
酒を語れ、唄でもうなれ、
俺達の話の種は澤山あるのに。

死の問題なんかを語つたねえ、
何を語つたつて、考へたつて何うなるものか。
俺の貧乏がチョックラチョイと改まりはしねえや

メチャクチャな理窟の雑音を聞く中に、
夕暮の近づくけはひが街の方でした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

俺は二階の檐側から之を見て
『俺は近頃反省する』
理窟の虫に云つたのぢやない。
俺の獨言だ。俺の心が誰にわかるものか。俺にだ
　つて解りやしねえ。
理窟の虫め、何と云つた、
『孤立した個人はない。社會を離れた個人はない』
俺は愁うまで感傷してゐる時に
理窟なんかきゝたくはないや。

無暗に情なくなつたんだ。
元來俺はバカだと云ふこと、
生れてから今日まで、何をクダらぬことをして來
　たらうと云ふこと、
平凡な單調な、苦も樂もない此生活
いつまで行つたら何うなるだらうと云ふこと、
近所の人は皆理窟ばかり云つてやがるし、
卅日には勘定とりにきやがるし。

俺はつい先達てまでこんなグチは思はなかつた
今月は午の一白水。星が悪いに違ひない。

■**頰　紅**（尾島菊子著）

婦人記者の生活を緯として、これにその一家の生活や、美貌と放縱な性質とで有名な友人のラブ、アツフエアーや、自分に戀する弟のやうな畫家や、或る男との儚ない戀などを經として成れる一篇の小說である。事件ばかり走馬燈のやうに變化して、人生の根底に觸るゝ處尠く、餘りに興味中心に傾き過ぎて居るのは、こういふポピユラア、ノベルとしては誠に止むを得ぬ處であらうが、理窟を拔きにすれば甚だ面白いものである。（金八十錢日本橋區通四目丁春陽堂發行）

■**煤　煙**（森田草平著）

煤煙といふ小說は隨分有名なものであつた。然し不幸にしてそれを讀まなかつた自分は、今この第三卷だけを讀んだんでは、前後の關係をよく知る事が出來ないが、要するに、是に現はれた要吉と朋子との戀はお互にいろ〳〵なローマンスを拵へ上げて、對手にその役割を勸めさせてゐるとしか思はれぬ。

たとへば、要吉が朋子の掌に强い酒を注いで飮んで見たり、朋子がナイフを取り出して要吉に自分の肉を割いて血を啜つて吳れと云つたりするのを見ると、相手には如何にも生眞面目らしく見せて、內心自分でも操つたいやうな芝居染みた事をやつて居るやうに思はれて、現代人の戀愛つていふものはこんなものかなアと、只だ只だ感嘆仕るより外は無い。朋子が如何しても眞面目に戀愛の出來ない、感情ばかりで體の上に更に一步を進め得ないのをも、その原因を朋子の肉慾の絕無といふ事に歸して居るが、尠くとも是れに現はれたゞけの點では、やはり女が肉の恐怖に囚へられて居るとしか思はれぬ。（金七十五錢日本橋區下槇町如山堂發行）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

或る男の影

荒畑寒村

七月初めの或る朝であつた。

長雨に青苔の一面に生えた庭の土や、こまかい暗緑と淺緑との層を作してゐる樹の葉は、ヂリヂリと蒸し殺すやうに苦しい朝やけに照り返されて、ほてるやうな息を吐いてゐた。油蟬のヂイ……、ヂイ……と、絞め付られるやうな鳴く音が、極熱に溶解された銀のやうに白く底光りのする空から落ちた。

雑誌の原稿を書きかけたが、どうしても考へが纒まらないので隣りへ往つて見ると、Ｏ――は座敷の眞ん中に机をもち出して、矢張り急がしそうに原稿を書いてゐた。

『何處からか、原稿をよこしたかネ。』

『いや、まだダ。尤も、俺もまだ出來ない。』

『暑いからナ。』

『全くだ。こんな日にや、何處か凉しい處へ往つて、廣い室の眞中で晝寢でもして居たいョ。』

自分はＯ――と相顧みて笑つた。

自分が往くと同時に、Ｏ――はペンを抛つて了つて、去年の夏、彼が病後の妻君と一緒に往つた、日光や中禪寺の話をし始めた。

『僕等が往つたのは八月の半ば頃だつたが、中禪寺湖のそばの宿屋へ着いた時にや、暖袍を借りて着たほど寒かつたからネ……。』

『そうだらう。八年前、僕が足尾銅山から山越しに中禪寺湖へ出た時なんかも、やつぱりそうだつたョ。……峠から足尾の町を見下すと、擂鉢の底のやうな狹苦しい處に、黄色い埃りを被つた板葺の平屋がゴチヤゴチヤ並んで、夏のさ中の日光と、銅山の溶銅工場の煙突から吐き出す土色の煤煙を浴びてゐるのだ。そしてその周りの山と云つたら、青いものなんか苔一つ生へてゐやせず、雨や風の爲に崩れ落ちないやうに、太い綱で編んだ網が被せてあるんだ。……それが君、僅か三里か四里、山路を越して中禪寺湖の畔へ出ると如何だい？。白い西洋館が碧い湖に影を浸して、赤く塗つたヨットが繋がれもせずにユラユラ浮いてゐる。樹立の深い岸では、ハンモツクを釣つて晝寢してゐる奴がゐる。眼を上げると、男體山が眉を壓して立つて、翠り色の冷たい霧を降らしてゐるやうだらうじやないか。……マアあの位ゐ、皮肉な社會の縮圖はないネ、まつたくアイロニーだョ。』

Ｏ――は自分の喋べるのを聞きながら、只だうす笑ひをしてゐるばかりだつたが、やがて手を振つて語を遮ぎつた。

『オイ、オイ、もう止せよそんな話。なほ暑くなつちやつて、仕事なんか出來やしない。今年もまた二三日往きたいなア。』

『往くさ、いくらもかゝりやしまい？。』

『處が、去年はいくらもかゝらない積りで往つたらウンとかゝつてネ、東京へ歸れない始末さ。仕方が無いから、折を持つて田岡嶺雲を見舞つて、やつと金を借りて歸つた次第なんだ。……今年はもう嶺雲も居ないしなア……。』

『ナーニ、足りなくつたら、夫婦して日光から馬を曳いて歸る迄の事サ……。』

二人か寢そべつた儘、馬鹿話に笑ひ興じてゐると、誰だか門口

でおとずれる者がある。
『A――、A――、誰かお客さまだゾ。』
O――は、妹のA――子を呼んだ。

客はM――と云つて、二人のやつてゐる雜誌の讀者で、古くからの同志ではあつたが、會ふのは今日が初めてゞあつた。
色の黑い、丸顏の、如何にも武骨な風采ではあつたが、また何處となく愛嬌のある、人なつこい、三十近い青年であつた。西洋の田舍の若者が着るやうな、襟のせまい、妙な舊式の、皺立つた縞洋服でキチンとかしこまつて、
『いろ〳〵御奮鬪で、感謝して居ります。』
と云はれた時には、自分は一寸擽つたいやうな感がした。
『いつ、こつちへお出でゞした?。』
『二三日前です、點呼だつたものですからナ。農家はいま恰ごヒマですから、來た序だと思ひまして、Y――君にお宅を伺つて、早速やつて參つたのです。Y――君のお父さんの家は私の家の處がらヂキなので、Y――君とは以前から懇意でした。』
『じや、F――町からヂキですネ。』
『えゝ、三里位でせう。M――の國もうK――境です、T――郡ですからナ。』
『それじや、僕と同國だ。』
M――は、そう云つた自分の顏を見て、
『あゝ、あなたはY――市でしたナ。』
と云つた。自分は此の時ふと、いつぞやO――と、自分と、二人に宛てゝ手紙をよこした、M――と云ふのは、此の人だつたナと思ひ出した。
『君でしたネ、いつだつたか、御手紙を下すつたのは?。H――市の陸軍懲治監獄の事を小說に書かないかつて……。』
『そうです、私でした。……私は四十年兵でしたけれ共、懲治監獄へ二年やられて居ましたから、やつと去年除隊になつたのです。』
『ホウ、二年?! 何をやつたんです?。』
O――と自分とは、一齊にこう尋ねた。
『脫營です。そして軍服だの、軍隊手帳だのを、玄海灘に抛り込んだものですから、軍器破毀罪で一層重くやられたのです。』
『四十年……?、すると、F――君なんかと略ぼ同じ頃だナ。』
自分はO――に訊いて見た。F――、その脫營に依て　時社會に大センセーションを起した人。上海に潜伏してゐたのを捕へられて、H――市の陸軍懲治監獄に送られ、今年の春漸く除隊になるとすぐ、革命黨に投ぜんとして再び支那に航つた人。そのF――は、確か四十一年兵だつたと思つた。
『えゝ、F――君とは隊は異ひましたが、H――では一緒でした。それでF――君は、何か懲治監獄の消息を話しましたか。あゝ、會はないで支那へ往つて了つたんですか。そう、そう、あなた方も地方の監獄で御苦勞なすつたんでしたナ。然し、懲治監獄と來たらその酷い事はお話にならない位で、軍隊と彼處との差は、地方と軍隊との差よりも甚だしいのですからナ。エゝ、それア食物なぞは殆んど軍隊と違ひません、然し、練兵が實に酷いのです。夏のさ中に、二貫もある砂嚢を三つ入れた背嚢を背負はせ、二貫五百目位の木銃――懲罰兵には眞實の銃も彈丸も給しません――を三つ位荷はせて、炎天の下を二時間でも三時間でも駈け足をさ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

るのです。その中に、三人、四人、練兵場の燒石の上にブッ倒れてへたばつて了ふ者が出來ると、上等兵や軍曹がやつて來て、木銃で散々突く、撲る、ブチのめす……。そして眞實にへたばつたか如何かを驗すのです。で、愈々眞實だと解ると、今度は多勢で素裸にして、手取り足取り曳ずつて往き、木馬の上へ仰向けに背骨を曲げて縛り付けるのです。こうしてまた二時間でも三時間でも天日に晒しては、時々バケツに水を汲んで來て、仰向けて垂れてゐる顏へブツかけるんです。

それから銃劍術……先にタンポの附いた木銃で、突き合ふ奴ですナ。衞兵は皆な厚い革の籠手や胸當を着けますが、懲罰兵は何も着けません。そして衞兵の方は、始終新手が入れ更り立ち更りしますが、吾々の方は散々突き捲られて、身躰中まつ蒼に膨れ上つて、鼻血を出してブッ倒れて了はない限り、交替する事は許されないのです。顏なぞは赤黑く一面に脹れ上つて、手を障ると火のやうでした。飯處では無い、もう唾を嚥み込む事も出來なくなつて、自分の顏が窓のガラスなぞに映るのが恐ろしかつた位です。

……冬になると、皆なが辛がるのは水浴でした。地方の監獄では、水浴はさせませんでしたか?。……何しろ練兵場に立つと、躰がガチガチ慄えて、手から銃の落ちるのが解らない位ゐ寒い時分に、二日位ゐ前から汲んで置いて、すつかり凍り切つた水風呂へ、五分間位ゐツヽ込んで置くんですからナ。中で氣絶する奴……、上ると同時に、鼻血を吹いて卒倒する奴……、それア實に酷いです。如何しても行かないと泣いて賴む奴を、二三人して引つ擔いで來て入れたりします。その爲に氣狂ひになつた者も、二人や三人じやきヽませんでした……。』

○……は、いかにもショックされたやうに、眉を嚴しく寄せたまヽ、默つて聞いてゐた。

『無茶つて云ふんだか、野蠻つて云ふんだか、人間の感情を持つた者に、そんな兇暴な眞似が出來るたア、到底信ぜられない位だなア。それで、同盟して反抗するといふやうな事はありませんか?……。』

自分は、こんな慘たらしい話を、然も自ら遭て來た此の慘たらしい話を、些さかも感情の激したやうすも無く、熟した處の無い調子で、世の常の事を談るやうに話すH――が、寧ろ不思議に思はれた。また如何して人間が、こんな暴戾な虐待を堪へ忍ぶのだらう、同盟して反抗するといふやうな事は、當然あり得べき事だと思つて聞いたのであつた。

『ダメです、衞兵は皆な武裝して警戒してゐますから。そして隣室の者とは、絕對に話す事を禁ぜられてゐますから。それでも、もう絕望してヤケになつた奴が、まるで氣狂ひ見たいになつて、泣きながら手向ふ事なんかあります。するとグルグル卷にフン縛つて、懲罰兵仲間に毆らせるのです、佩劍の厚い帶革で……。狡い衞兵なぞは、自分の寢臺の傍へ曳ずつて來させて、寢てゐながら手を出して、懲罰兵の顏を滅多打したりするです。それでも私は、仲間を毆る事は如何しても出來ないと強情を張つて、到頭命令に從はなかつたために、闇室だの、減食だのの懲罰に、幾度會つたか知れませんでした。然し、骨を刺すやうな寒い冬の夜中なぞに、何處かの隅で、細い營竹を革で裹むだ調馬鞭の音と一緒に、大の男があげる叫び聲を聞いたりすると、余りいヽ心もちはしませんでしたネ。殊に鞭の音は些ともしないで、それでゐて苦しそ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

うな悲鳴が聞へる時なぞは、ごんな拷問をやつてゐるのか、その方法が解らないだけに、却つてもの凄いやうな感がしました。

マア、彼處へ入れられて、今日こうやつて、無事に生きてゐるのが不思議な位なものです。……あゝ、今日もまた一日命を助かつた……。二年の間といふもの、一日經つちやそう思ひ、一晩過ぎちやそう思つて、暮らしましたからナ……。實際、彼處に比べちやア、軍隊の重營倉なんか、自分の家へ歸つて寢てゐる位ゐなもんです。私が懲治監獄から歸隊して間もなく、例の〇〇事件が起りましたが、K――先生と書信の往復をしてゐたのが解つて、私は中隊長が、呆れた奴だ……と云つて重營倉を命じましたが、結句練兵が休めていゝ位ゐに思つてゐました。ハツハ……。』

O――も自分も一緒になつて笑つた。自分は殊に、『呆れた奴だ……』と云つたその中隊長の樣子が、まざまざと眼に見へるやうで、堪らなくおかしかつたので…………。

十二時が鳴つた。自分は京橋の方の勤め先へ出なければならないので、M――に挨拶して家に歸つた。

その日の夕方、O――と京橋のB――社で落ち合つた。鋪石道に葉を曳くばかりに伸びた柳の枝は、冷え行く大氣にシツトリ濕つて、暮れかゝる大路の薄明るい空には、咽つぽい埃りの香ひが輕く浮動してゐる。新宿行に乘らうと思つて、數寄屋橋の電車停留場で俟つてゐる間に、O――は『やまと』と『二六』の夕刊を買つた。その一面には『李烈鈞遂に兵を擧ぐ』とか『黃興陰かに南下す』とかいふ題が、大きな活字で二段抜きに出てゐる。南方各省の獨立！支那の第二革命！李烈鈞の擧兵！黃興の南下！血を躍らせるやうな文字が、特に大きく記事の中に目立つてゐる。

『愈々初まつたナ。今度は黃興なんかと一緒に、張繼も大にやるだらう。まづ第一に、黎元洪なんていふ奴を、軍神の血祭りにするがいゝんだ。』

『ハツハ……。然し、F――のいつかの手紙に、革命黨が一切日本人を採用しないと書いてあつたから、F――も一寸困るだらう。で無けりや今頃は、李烈鈞將軍の幕下にでも馳せ參じて、大に活動して居るのだらうが………。』

『そうだなア。何しろ志望貫徹の時節到來しながら、そんな風じやF――君も奈何ともしやうがあるまい。もう余程以前に、……一聯隊の兵を提さげて、長驅P――を衝き……、そう手紙に書いて來たつけがネ……。』

『F――つて云や君、M――も往つたらしいゼ。』

『へエ、何か、そんな樣子でも洩らしたのか？。』

『いゝや、別に何とも云つて往きやしないんだがネ。ウン、君が社へ往つてから、一緒に晝飯を喰つて、それからまだ、二時か三時頃まで話して往つたらうヨ。上海までの船賃はいくらだらうなんて聞いたり、歸りがけに、……またお目にかゝれるかごうか解りません、御達者で御奮闘を祈ります……なんて云ふんだ。何んだか些し樣子が異しいと思つて、是からすぐ家へ歸るんじやないんですかつて聞いたら、……家へはもう歸りません……つて云つたがネ。そういふ事情を知らないもんだから、支那へ往つて、革命軍に加はらうと思つて、それとなしに暇乞に來たのじやあるまいか？。』

『そうかも知れんなア。……一体、自分の國の事はウツチヤツ

いて、他人の國の革命にばかり熱中するのは、隨分妙なものと思ふんだけれど、然しその心もちは確かに同感が出來るネ……。僕等にしたつて、若し支那の戰爭が純粹なアナアキストの革命運動だつたら、それこそ飛んで往くネ。僕等がインデイフエレントな態度しか執れないのは、人種とか國籍とかの問題で無くて、只だ支那革命の性質の問題なんだからナ……。』

『そうだ。つまり何かやりたいといふ、その心もちだな……。そして、理屈ばかり云つて何もしないでゐる者よか、寧ろその方に餘程同感が出來るんだが……、本ばかり讀んで、理屈ばかり云つて居る者は一向運動をしないし、多少運動でもやらうといふ者は、何にも理屈が分らないし、仕方が無い……。』

……夢に現はれた情景のやうに、忽然として來り忽然として去つたM――。その不明な然し遣る瀬無い煩悶をやらうとして、朧ろ氣な理想に憧憬し、盲目的に權威に反抗して、敢て扶くる友なき戰ひに、獨り悲しみ、獨り憤りつゝあるが如きM――。無關心な同志中の理論家と、無自覺な勞働者との間に、盲目に狂つてゐるが如きM――。自分はその心情を悲しいと思つた。

二人は電車に乘つた。

互に苦笑もしなかつた……。

死んだ獨逸社會黨首領ベーベル、曾て議會の壇上に一塊麵麭をかゝげて、十年の星霜は平民の麵麭の質を惡くし、量を尠くし、そしてその價を高くしたと述べた。憐れむべしベーベル、彼が卅七年間の政治的努力は、竟に平民を飢えさせるに過ぎなかつた。（寒）

みんなが腹がへる

榮

■

みんなが腹がへる。
自然の法則だ。
みんなが食はなければならぬ。
正義の法則だ。
みんなが食ふ。
待たれたる法則だ。

■

改良！
平民のための改良！
平民のための監獄改良！

■

こつちの定住者からあつちの定住者へ、
その贅澤品を背負つて運び廻る、
なるほど君は身輕なそして自由な旅人だよ。
どうだい、小劍！

――八月廿四日讀賣新聞參照――

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

或る男と女郎との對話

伊庭孝

或る遊廓の大店の廻部屋なり。廿六七才の若き男が客なり。廿二才位の若き女が相方の娼妓なり。

女。暫くだつたわね。

男。さつきから何遍も暫くだつたと云つてゐるぢやないか。もう暫くだけはよさうや。

女。さうね。此の前の前の時にね、指を組み合せちやつたでしやう。しらずにさ。それだから緣切になつちやつたのかと思つたのよ。

男。さうかい。たまには來ない自由を與へてもらひたいものだね。暫く己が來なかつたもんで、緣が切れたらうと思ふかどうか、本當か嘘かは己はしらないよ。本當にした處でそれはお前さんの勝手だアね。さうだらう。だけれども己が來なかつた事をそれ程氣にしてゐたと吹聽されては、己だつて少しは氣にかゝつて來るわな。何だか己が當然惡い事でもしたやうでどうもすみませんとあやまりたくなるんだよ。

女。おあやまんなさいよ。

男。馬鹿を云つてらあ。お金を出してあやまらされてたまるものか。併しね、あやまつたも同然なんだよ。お前さん方に、どうして來なかつたのつて云はれるとギヨツとするね。そのギヨツとする心持が宜いつて云ふんだつてね。

女。さうかしら。

男。己は知らないよ、己は今までそんな事で宜い心持になつた事は一遍もないんだ。寧ろなんとも云へない厭な心持になるんだ。己なんかはそんな事で避易するやうな男ではないのだが、廓といふものがぐつと己等をおさへつけるんだね。

女。そんな事があるもんですか。

男。さうなんだよ。むづかしい言葉で云ふと遊廓の空氣の壓力といふんだね。平生見得を張らない奴が、そして女の子に可愛がられたいといふ野心が別にある譯でなくて、それで居てちよいといろ〳〵な事を氣にするのだよ。

女。氣にしなくつたつていゝのにさ、あたし達なんか何とも思つてゐやしないんだわ。

男。さうです、さうです。何とも思つてゐやしないに違へねえさ。然しお前さん方だつて廊下で顏を合せれば、まア忘れてたわ。顏を見て思ひ出してよとも云へながらうし、方々お廻りになるんでお忙しいんでせうとか何とかお座なりのおきまり文句を云ふんだらうが、まあ大抵の奴は、方々廻り度くも廻る處と、軍用金に不自由してゐるんだがね、お前さんの方が何とも思つてやしなくつてもこつちは甚だ氣にするんだよ。

女。まあ、いやな人ね。そんな下らない事を氣にして。

男。下らなくないんだよ。つひ平生方々廻るんで忙しくなり度いと心がけてゐる奴を云はれるんでね、なあにそんな事はないさとか何とか返事はするもの、金がなかつたと思はれ度くない、願はくば仰せの通り方々廻るので忙がしかつたやうに思はれ度いと一寸思ふのだよ。そこでさういふ時に、足袋の親指の處に、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

おまんま粒のやうな穴でもあいてゐやうもんなら、大きに冷汗をかいて了ふのだ。お前さんの方では足袋の穴位は何とも思つてゐやしまいがね。

女。ほんとに下らない事を氣にするのね。男といふものは皆なそんなものでせうか。

男。さうらしいね。己みたやうな男でさへ、隨分それだから、ほかの奴等は猶更だらうよ。そこでお前さん方の方から、お金がなかつたんでせうと眞正面にやつて來られると、どんな奴だつて何そんな事があるもんか、金はあるともあるともといふ奴はないね。大抵は赤面して逃げ出すか、全くその通りといつて破れた足袋を突出して安心するかどつちかだね。

女。それはね、隨分腹ではさう思はないではないのよ。然し何ぼこんな商賣でもそんな事は云へないわ。

男。云ふ方が宜いね。

女。失禮だわ。それが失禮でないやうだと、あたしの方で責任が出來つちまふから。

男。それだからだめだといふのだよ。立引(たてひき)だなどゝいふ事をすれば、それがいゝと思ふのは無論間違ひだといふ事は、お前さん方でも知つてゐるだらう。そのお客がお金がないのにおいらんに來て呉れと云はれた時は、泥坊するか立引して貰ふかどつちかだらう。お金がないと思はれたくなければ泥坊をする、お金がないと思はれても耻かしくなければ立引をしてもらふ。そこで、あなたお金がないのでせうと云はれた時、いやあるといふには泥坊をしなくてはならない。けれどもない。けれどもないといふ時、女郎に立引して貰はうと思ふ男ばかりはない。女郎はどんなに深間になつたからとて立引すべきものでない位は心得て居る男でなくては駄目だらうぢやないか。

女。それはさうだわね。そこでどうしたら宜いの。お客の顏が暫く見えなかつたら、あなたお金がなかつたのでせうつて云ふの。隨分變だわね。お金のある人だつたら怒つちまふわ。お金が實際なくつたつて怒つちまふわ。

男。解らないな、此の人は。斯ういふ事なんだ。男といふ者の心の中を能く知れといふ事なんだよ。男といふ者はさつき云つたやうに萬事に見得坊になるんだから、その見得張る所につけ込んで金をとらう――とるといつては人聞きが惡いが、金を戴かうといふのがお前方の魂膽だらう。それが大間違なんだよ。男が大束をきめこんでゐる時は、お前方からは宜い心持さうに見えて、男といふ者は宜いなあと思ふかもしれないが、仲々そんな處ではないのだよ。見得を張つてゐる男といふ者は綱渡りをしてゐる太夫のやうで、お尻の穴がもづもづしてゐるのだ。それを知らずに末社(まつしや)どもが騷ぎ立てゝゐる圖は正に悲劇だね。是はお金ばかりではないよ。かうやつて廻部屋か何かにゐて、座敷の方のお客が藝者の糸で、器用に富本から義太夫までやつてのけてやんやといはれてゐるのを聞くと、何とも云へない淋しい心持がする。そのお客の心持が思ひやられて可哀さうになつて來る。そのお客はその時は得意だらうさ。然しさういふのを聞いてゐて、己も哥澤の一つも歌へなくつちや巾がきかないさばかりに、稽古屋へ通つて女郎買の爲入(しいれ)をする男の、稽古屋の門口を潜る後姿を想像してごらん。

女。さうねえ、たまらないわねえ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

男。けれども男には意地といふものがあるから、ある處までいかなければ我慢の角を折らないのだ。それで暫くたてば、やはり廻部屋で人の新内を語つてゐるのを聞いて、馬鹿々々しいと思ふやうになる、さうなるのは無論悧口な人の部だぜ。馬鹿な奴は主人をしくじる、不義理をする、是はお話にならないやね。それだけれども皆なおいらんをうらむぜ。

女。さうよ、自分で遊んで置いて。

男。さう冷淡に云ひ切る事も薄情すぎるテ、さうしたものでもないんだが。まあそれはいゝとして。ともかく此の節の人は悧口だから、不義理が出來る前に綺麗に逃げ出して了ふのだ。誰だつてお金を出して綱渡は御免だからね。ところが下等な女を置いてゐる處となるとさうでない。すべてがむき出しで、お客はお金の安いのを好むもの、お金のないものとなつてゐる。お客に散財させない程お客が喜ぶといふ事を心得てゐる。それだからお客は破れた足袋を突出して遊んでゐられる。落着があると近頃の言葉では云ふのだ。

女。ではかういふ大店なんかでは、その落着がなくつて。

男。ないね。お客とお金とを同じものと見てゐるからだよ。お金はお客が懷ろに入れて持つてゐるもので、お金はお客ではないのだが。どうも大店などではお客の顔と菅原道實の顔とを混同してゐる。それだからお客はそこに氣が附くと、自分は菅原道實を擔いで來たお使みたいで、甚だ心細い。それよりもお札はお札、お客はお客で、お客はお札がない間は來ないものと心得て、無理なお札を背負はせない事さ。お札がない間は來ない、お札が出來れば來る。それもそのお札を氣長く費はうといふお客は、これ位風のいゝお客はないのだが、どうも店の者にしろ、娼妓にしろ、お客は即ちお札と思ひ込んで、むやみにお札を取り立てやうとするものだから、肝心のお札を持つてゐる持主のお客が、終ひにはお札をもつた時でも此の廓へ來るのが厭になつて了ふのだ。お客は元來お金のない者と思つて侍(かしづ)けばどんなお客でもきつと心持よく、いはゆる落着をもつて來るよ。そこで何も、お金がないんでせうと眞向に浴びせかけなくても、すべてに其の心持でいくのだね。

女。わかつてよ。

（八月十五日稿）

胡麻鹽頭

涉六

△『人と超人』を本號きりで切りあげたにつき、次號から右の題で勝手な熱を吹く事にする。

△曾て獄中で『髮苅れば胡麻鹽落つる寒さかな』とやつた事があつたが、それは少しく誇張の言で、實を云へばまだ鬢邊白數莖といふ位なものであつた。然し實際、僕の頭は、遠からずして確かに胡麻鹽となるべき兆候を示して居る。白頭もツル〳〵頭も頗る風流味のあるものだが、胡麻鹽頭は實に憎たらしい、毒々しいものである。

△と云つて、どうも仕方が無いなら、敢て自ら進んで運命を甘受して置く。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

人と超人

バァナード、ショウ作
堺　利　彦　譯

第二幕（つゞき）

ヘクトル・マローンは東部アメリカの人であるが、少しも其の國籍を耻ぢて居らぬ。そこが英國のハイカラ連中の氣に入つて、奴は見す〳〵知れた自分の不利益を隱そうとも輕めようともせず、白狀して了ふところが男らしいと云はれて居る。そして是ほど明瞭に自分の罪でない事の爲に、辛い思をさせるのは善くないと云ふので、皆が彼に向つて特別に親切を盡す事にして居る。然し彼れの婦人に對する慇懃の態度と、業々しい道德呼ばゝりとが、餘りに譯もない、並はづれの遣方であるので、それには皆も少し困つて居る樣子である。彼れの口輕な上調子は、初こそ少し人を困らせるものゝ、慣れて見ると存外誰も面白いと思ふ樣になるが、然しそれにしても人々は彼に對して、滅多に人の噂などしてはならぬ（尤も、極々內密の醜聞なんぞは別であるが）といふ事を悟る樣に仕向けて居る。又辯舌といふ事は、彼が今渡來した此國よりも一段野鄙な文明の素養だといふ見識である。然るにヘクトルの方では一向其邊の考へに服して居らぬ。彼から見れば、英國人は兎かく自巳の足らはぬ所を手柄にして居る。自分の色々な缺點をば、そこが即ち育ちの善い所だと思つて居る。又、英國の生活には敎訓的の言葉を（即ちヘクトルの謂ゆる道德的風氣）が缺けて居る。英國人の行は婦人に對する尊敬が不足して居る。英國人の發音は World, girl, bird などいふ語に於いて其の卷舌が甚だ卑しく聞える。英國の社會は隨分物事を露骨に話して、塲合に依つては許す可らざる粗野に流れる事がある。英國の交際は賭事とか、物語とか、其他の遊戲とかに依つて今少し賑やかにすべきである。斯くて、ヘクトルは大西洋を橫ぎつて英國に向ふ前、大いなる苦心を以て當世第一流の素養を作つたのであるから、今に及んで前記の諸缺點を學ぶべき義務があるとは思つて居らぬ。ヘクトルより見れば、英國人は右の如き素養に就いては（何の素養に就いても同樣だが）一向無頓着で、さもなければ敬して之を遠ざけて居る。所が、實を云へば、ヘクトルの素養なる者は、三十年以前に英國から輸出した文學にかぶれたに過ぎないもので、それを彼は今日再輸入して、即時に其荷を開いて、談話の機會のある度每に、英國現在の文學、科學、藝術の上に眞向からそれを投げ下さうといふのである。斯かる突擊に對して人がアツケに取られて居ると、彼は之を以て、自分が英國を敎育するに與かつて力があるのだとして、大きに自惚れる事になる。人がアナトール・フランスやニイチエに就いて無邪氣に語り合つて居ると、彼は忽ち其中に割つて入つて、マシユー・アーノルドや、ホルムスの『朝の食卓の專制家』や、或はマコーレーすらをも擔ぎ出して、散々一座を荒して了ふ。又彼は元來敬虔な信者風であるのだが、兎かく不謹愼な滑稽を云ふので、ツイ不注意な人は彼と道德問題を論議する時、世俗の神學などを論外に置て掛る事になる。すると彼は其時になつて、急に開き直つて、抑々

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

我が行爲の理想とする所は、即ち正直なる男子と純潔なる婦人とを作らんとする、彼の全能の神の聖示にあらざるか、などゝ相手を煙に卷いて了ふ事がある。斯くて彼れの風采の極めて新味を帶びて居るのと、彼れの素養の恐ろしく古臭いのとを見ると、此人物の果して交るに足るか否かを判定するに非常の困難を感ずる事になる。彼と交際すれば如何にも面白く、如何にも愉快ではあるが、さりとて智識上に於いて何等新しい者を彼から得る事は出來ない。殊に彼は政治を賤み、又彼が其の友なる英國の資本家連よりも恐らく大いに長じて居るところの、商業上の話をするのを勉めて避ける樣にして居るので、猶更人は彼より何の得る所もない。それで彼は戀愛派の古風なクリスチアンと最も善く氣が合ふのである。オクテビアスとの間に友情の成立つたのは即ちそれが爲である。

容貌を云へば、ヘクトルは廿四歳の身綺麗な青年で、短い、氣の利いた、黑い髭と、涼しい恰好のいゝ眼と、人好のする陽氣な表情を持つて居る。流行社會の立場から見て、彼れの服裝は申分なく出來てゐる。今ホワイトフイルド夫人と連立つて、館の方より車道をやつて來る時、如何にも勉强して夫人の機嫌氣褄を取り、そのため餘り氣の利かぬ夫人の上に堪へ難き重荷を負はせて居る。是が英國人ならば、夫人には別に構ひ立をせず、二人共に手持無沙汰で冷淡にして居る所であらう。そして夫人は又、そんな風に構ひ立をせずに棄てゝ置かれるか、さもなくば勝手に好な事を喋らせて貰ひたいのである。

ラムスデンはブラリ／＼と自働車の側に寄りてそれを見る。オクテビアスはヘクトルと一緒になる。

アン（嬉しさうに母親に飛びつき）あのねえ、お母さん、聞いて頂戴！ジャックがねえ、私を自働車に乘せて佛蘭西のナイスに連れて行くッて、好いわねえ。私今倫敦中で一番仕合せな人だわ。

タナア（少々やけに）ホワイトフイルド夫人は反對でせう。無論反對でせう。ねえラムスデン君。

ラムスデン　左樣、マアそうだらうなア。

アン　あなた反對ぢやないわねえ、お母さん。

ホワイトフイルド夫人　私が反對する！何で私が反對するものかね。そりやお前、キット体の爲になりますよ。（タナアの方にツカ／＼と寄り）私あなたに、折々ローダを連れて出て戴きたいと思つて居ましたのですよ。彼子は内にばかり引込んで居て仕樣がありません。尤もそれは又お歸りなすつてからで宜ござんすが。

タナア　僞りの淵の底に又一つ淵がある！。

アン（此の叫びに對する、人の注意を他にそらさうとて、早口にて）オ、私忘れてた。あなたまだマローンさん知らないわねえ。御紹介します。私の後見人タナアさん。ヘクトル●マローンさん。

ヘクトル　初めてお目に掛ります。所でタナア

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

さん、ナイス行のお仲間に私も差加へて戴く譯に參りませんですかね。

アン、アラ、皆んな一緒に行くんでせう？そうだわねえ。

ヘクトル　私も詰らないのですが自働車を一つ持つて居ますから、若しローブンスン孃が御許し下さいますなら、御一緒に乘せて戴きます。

オクテビアス　ヴアイオレットをですか！。

一同ハツトして互に氣を兼ねる。

アン　（小聲にて）お母さん、入らッしやい。色んな打合せは男の人達に任せて置けばいい。私は手提の用意をしなきやならない。

ホワイトフイルド夫人は少しまごついた樣子であつたが、アンが人目だゝずに引張つて、そこの角を曲つて館の方に姿を沒して了ふ。

ヘクトル　甚だ差出がましい申分ですけれど、ローブンスン孃が御承知下されば宜しいのでせう。

一同白けわたる。

オクテビアス　どうも、ヴアイオレットは內に置かなくちやなりますまい。あれにはチと譯があつて、そんな旅行なんどに行かれないのですから。

ヘクトル　（面白がつて、少しも得心せず）そこはアメリカ流ですね。ローブンスン孃には附人でも無くてはイケないのですか。

オクテビアス　そんな事ぢやありませんよ君、―少くとも そんな 事ばかり の爲ぢや ありませんよ。

ヘクトル　へえ！それぢや、外にどんな御差支があるんでせう。

タナア　（堪りかねて）話した方がいゝよ、話した方がいゝよ。秘密を保つにや皆に知らせて了ふより外に法はないんだ。マローン君、君がヴアオレットをナイスに連れて行くとすれば、即ち他人の妻を連れて行く事になるんです。ヴアイオレットは結婚してるんです。

ヘクトル　（仰天して）え！そりやほんとのことですか。

タナア　本當ですとも、內々ですが。

ラムスデン　（身分違の結婚などゝ思はれてはならぬと、精々威儀を繕ひて）あれの結婚はまだ披露して無いのですからな、今のところ知らぬ貌にして置いてくれと本人が申すのです。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ヘクトル　御本人の御望みとあれば、それは私も尊敬いたします。然し其夫たる人が誰方であるか承たまはる譯に參りますまいか。さすれば此の旅行に就いても、其の方に御相談申上げたいと存じますが。

タナア　其れが誰だか分らない。

ヘクトル　（態とらしく、貝が殼の中に身を引込める樣にして）それならば、モウ何も申す事はありません。

皆々以前よりも一層白けわたる。

オクテビアス　嘸かしあなたは妙な事だと御考へなさるでせう。

ヘクトル　少しおかしな譯ですなア。失禮な申分ですけれど。

ラムスデン　（半は言譯らしく、半はプン〳〵して）ヴアイオレットは秘密に結婚したのです。そして其夫が、姑く其の姓名を人に明す事も禁じたものと見えます。所が、あなたは彼子に對して心を掛けてお居での樣にも見えますから、それで是だけは御話して置くのです。

オクテビアス　（思いやりありげに）是がため君が失望なさらなければいゝがと僕は案じて居ます。

ヘクトル　（打解けて、再び貝殼より出で來り）　いや全く僕には打擊です。然し妻たる者をどうしてそんな目に會はして置くか、僕にや殆んど分りませんな。習慣にも背くし、男らしくもないし、思慮も足りないし。

オクテビアス　御察しも下さるでせうが、我々も實に深くそれを感じて居るのです。

ラムスデン　（ムラ〳〵して）　いづれ無經驗な馬鹿青年でせうよ。こんな事を秘密にして置くと、どんな始末になるかと云ふ事も知らんで。

ヘクトル　（著しく道德的反感の徴候を示し）　そうですなア。よく〳〵年の若い者で、而もよほどの愚者で無くては、斯樣な行ひも宥恕する譯には行きません。ラムスデンさん、あなたは隨分溫和な御意見ですね。私から見れば、溫和に過ぎて居ます。元來、結婚は男の氣品を上げる筈のものですが。

タナア　（冷笑的に）ハア！

ヘクトル　タナアさん、今の御冷笑は私の說に御反對の意味ですか。

タナア　（冷然と）　結婚して試して御覽。暫くのあいだ愉快な位の事はあるだらうが、氣品なんぞ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

上りはしないから。男と女の最大公約數は、どうしたつて男ひとりの約數より大きくなり樣がない。

ヘクトル　然しアメリカでは斯ういふ風に考へますね。婦人の道德番號は男子よりも高い。それで婦人の純潔な性情が正に男子の心を高める、そして以前よりもズツト善い人間にする。

オクタビアス（斷乎として）全く其の通りです。

タナア　道理で、アメリカの女が歐羅巴に住みたがる。一生涯、神棚の上で拜まれて居ちや堪らないからなア。然し何しろヴァイオレットの夫は氣品が上らない人だが、一体それはどうすればい。

ヘクトル（頭を振りながら）いや、タナアさん、あなたの仰しやる樣に、そう安々と其人の行ひを許す譯には行かない。然しモウ何も云ひますまい。假令其人が誰であらうとも、ローブンスン孃の夫には相違ない。私は兎にかく孃の爲に其人の事を好く思つて置きたいのです。

オクタビアス（其の心中の悲みを察して）マローン君、お氣の毒です、實にお氣の毒です。

ヘクトル（有難がりて）ローブンスン君、君は實に好い人だ。どうも有難う。

タナア　外の事を話して居玉へ。ヴァイオレットが館から來るよ。

ヘクトル　此の機會に於いて、若し皆さんが暫く私に彼の方と二人きりで話させて下さいますと、私は非常に有難く存じますが。實はせめて少しばかり泣いて此の御旅行を送りたいと思ひます。それには人樣のお耳に入れるでもないし。

ラムスデン（此場を逃れるを喜び）モウ宜しい、宜しい。タナア君、デビー、サア來玉へ。

（オクタビアスとタナアを連れて、自働車の側を通り、園の中にブラ〳〵と歩み去る）

ヴァイオレツト、往來を歩みてヘクトルの側に來る。

ヴァイオレット　誰も見てない？。

ヘクトル　見てない。

ヴァイオレツト、ヘクトルに接吻する。

ヴァイオレット　あなた私の爲に嘘を吐いてたんですね。

ヘクトル　嘘といふものは迚も駄目だ。私は直ぐに遣りすぎる。何時の間にか調子に乗つて虚僞の熱に浮かされて了ふ。（譯？）ヴァイオレット、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

もう私に發表させて欲しいもんだなア。

ヴアイオレット（忽ち眞顔になつて斷然と）いけませんよ、ヘクトル。云はないと約束したぢやありませんか。

ヘクトル　そりやあなたがいゝと云ふまでは約束は守るさ。けれど、あの人達に嘘を云つたり、自分の妻を認めなかつたりするのは、實に厭だからなア。隨分卑劣な譯さ。

ヴアイオレット　あなたのお父さんがあんな分らずやでさへなければねえ。

ヘクトル　父は分らない譯でもないさ。彼方の立場から見れば、それが正當なのだから。父は元來、英國の中等階級に對して偏見を持つて居る人です。

ヴアイオレット　それがおかしいぢやありませんか。ねえあなた、私こんなこと云ふのは厭で仕樣がないけれど、私が若しか――モウよそう、何でも無いんですよ。

ヘクトル　いや分つてる。あなたが若しか英國の家具製造屋の息子と結婚したら、あなたの身内では屹度それを身分違と謂ふだらう。然るに世界第一の家具製造屋たる私の馬鹿親爺は、私が此の圓滿完全なる英國の貴婦人と結婚しようとすると、只其人に肩書が無いといふ丈の爲に私を追出そうとする。勿論、それは無茶な話さ。然しねえヴアイオレット、私は父を欺くのは厭だ。私は丁度父の金を盜んでる樣な氣がする。なぜあなたは、早く私に發表させて吳れないのだらう。

ヴアイオレット　そんな事が出來ますかよ。色戀の事なら幾らあなたがロマンチックな事を云つてもいゝけど、お金の事についてそんなロマンチックなこと云つてちや仕樣がありませんよ。

ヘクトル（女房孝行の心と平生の道德呼はりの心との間に迷ひながら）それが即ち英國流だ。（衝動的に女に訴へろ）然しヴアイオレツト、何時かは親爺に見附けられるに極つてるぢやないか。

ヴアイオレット　えゝ〳〵、そりやそうですとも、何れはねえ。だけどモウ會ふたんびに此話するの止しませうよ。あなた約束したぢやありませんか、――

ヘクトル　宜しい、宜しい。私は――

ヴアイオレット（中々まだ默らうとせず）それに此の秘

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

密の爲に苦むのは、あなたぢやなくて私なんですもの。それから苦勞をするたら、貧乏をするたら云ふ樣な話は、私初からイヤですわ。馬鹿々々しいんですもの。

ヘクトル　何もそんな事しなくてもいゝ。獨立の出來るまで親爺の金を借りて置いてさ、（譯？）、そしていよ〳〵發表する時には、それを償却して了ぶんさ。

ヴアイオレット　（驚き且つ下げすみて）あなた働くつもりなの？あなたそんな事して此の結婚を汚すつもりなの？。

ヘクトル　私は固より結婚の爲に自分の品性を汚そうとは思はないさ。先つきもあのタナア君が其事についてチヨツト私を冷かしたがね、——

ヴアイオレット　畜生！私はあのジヤツク、タナアは嫌ひさ。

ヘクトル　（度量を示して）ナニ、あれでいゝさ。只少し善い女の愛を以てあの氣品を上げる必要があるのさ。それからタナア君がナイスまで自働車旅行をやらうと云つてる。私もあなたを連れて行きたいんだが。

ヴアイオレット　好いわねえ！。

ヘクトル　だけど、どんな事にしたら可いだらう。彼人達は私に、あなたと一緒に行つちやイケナイと注意して呉れたんだ。そして内證で、あなたは既に結婚してるんだと知らして呉れたんだ。こんな六かしい内證話を聞かされる光榮を有した事は生れて初めてだが。

タナア、ストレカーと共に返り來る。ストレカーは車の方に行く。

タナア　マローン君、君の車は大成功ですね。今君の技手がラムスデン君に自慢して見せてる。

ヘクトル　（熱心に、我を忘れて）ぢや行つて見よう、ヴアイ………

ヴアイオレット　（目くばせをしながら、冷然として）何か仰しやいましたか、マローンさん。私ツイ失禮しましたが、

ヘクトル　（氣がついて）いや何に、詰らない私のアメリカ式の自働車を見て戴きたいのですが、

ヴアイオレット　有がたう、ぜひ拜見いたしませう。（二人、往來を彼方に去る。）

タナア　今度の旅行に就いてねえ、ストレーカ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ー。

ストレカー　（車の方に一心になつて）え丶。

タナア　ホワイトフイルド孃も僕と一緒に來る筈だがね。

ストレカー　だらうと思つてました。

タナア　ロビンソン君も連中なんだ。

ストレカー　え丶。

タナア　そこでだ、君は途中で成るべく多く僕と一緒に居る樣にして、ロビンソン君を成るべく多くホワイトフイルド孃と一緒に居る樣に、旨くやつて呉れないか。そうすりやロビンソン君が非常に喜ぶから。

ストレカー　（振向いてタナアを見て）そうですかなア。（譯？）

タナア　『そうですかなア』だつて！。君のおぢいさんなら只默つて目禮をするところだ。

ストレカー　私のぢいなら帽子に手を當て丶敬禮したでせうよ。

タナア　そうして僕が其の丁寧慇懃なおぢいさんに一ソヴエレンもやるんだね。

ストレカー　ナニ、五シリング位なものでさア。（車を離れてタナアの側に來り）そしてお孃さんの方のお考へは？。

タナア　ロビンソンがアンと二人で居たがるのと同じ樣に、アンもロビンソンと二人で居るのが好さ。（ストレカーは冷かな懷疑の目を以て主人を見たが、やがて例の得意の歌を笛に吹き乍ら車の方に向ふ。）オイ其の妙な騷々しい音を止めて呉れ。そりや君、何のつもりだね。（ストレカーは落ちつきはらつて其の歌を仕舞まで歌ふ。タナアはさすがおとなしくそれを聞き終りて後、又話しかけ、今度はいよ〳〵本氣になつて居る。）エンリー、僕は勞働者の間に音樂を普及する事は隨分熱心に唱導したものだ。然し君が、ホワイトフイルド孃の噂が出るたんびに、すぐにやりだす其の音樂には反對するよ。今朝もやつたね。

ストレカー　（押しつけるように）幾ら何としたつて駄目ですよ。ロビンソンさんは早晩思ひ切らなきやならない時が來ますよ。

タナア　なぜ？。

ストレカー　およしなさいよ、分つてる癖に。尤も私の構つた事ぢやないが、何も私に對してそんなに空とぼけるにや及びますまい。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

タナア　空とぼけやしないよ。僕にや全く分らないんだ。

ストレカー　（笑ひながら意地悪げに）　え丶ソウでせうよ。そうでせうとも。私の構つた事ぢやない。

タナア　（力づよく）　エンリー、聞いてくれ。僕は平生から心掛けてる積りだ。君と僕とは雇主と技手との關係だ。僕は常に君に對して相當の距離を保つて、僕の私事を以て君を煩はしてはならない。況んや我々の間の契約は君の勞働組合の承認をも經て居るんだ。然し其代り君の方でも便宜を濫用してはいかんよ。君も知つてるだらう、ヴオルテールの言葉に斯ういふ事がある。餘り馬鹿々々しくて話されない事も、歌には歌へる。

ストレカー　それはヴオルテールぢやありますまい。ボーマーシエイでせう。

タナア　ウ、其通り。ボーマルシエさ。所で君は斯うだらう。餘り入りくんでチヨツト話しにくい事も、口笛には吹ける、と斯う思うてるんだらう。然るに惜しいかな、君の口笛は、大變調子は善いけれど少しも分らない。チエ君、今は誰も聞いて居ない。僕のお歴々の御親戚達も、君のあの組合の幹事の奴も居ない。そこでね、エンリー、一つ男と男の差向ひで話してくれ。君はなぜロビンソンがホワイトフイルド孃に對して駄目だと云ふんだ。

ストレカー　お孃さんが外に誰かを追つかけてるからですよ。

タナア　馬鹿いへ！外に誰がある？。

ストレカー　あなたさ。

タナア　僕!!!

ストレカー　あなたそれを知らなかつたと謂ふんですか。人を馬鹿にするもんぢやありませんよ。

タナア　（眞劍になつて）　君は冗談を云つてるのか。それとも眞面目か。

ストレカー　（赫となつて）　冗談ぢやありませんたら。（稍靜に）あなたの顏の眞中に鼻の附いてるほど明かな事でさア。若しあなたが本當にそれを感づかないとすりや、まだあなたもウブのお坊つちやんだ。（元の通り落ちついて）然し御免なさいよ、タナアさん。男と男で話せと云ひなすつたから、遠慮なく男と男で話したんだけど。

タナア　（狂氣の如く天に向つて訴へる。）それでは己が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

——己が蜂だ、己が蜘だ、己が眼ざゝれた犠牲(いけにへ)だ、己が狙はれた餌だ。

ストレカー　蜂だか蜘だか知らないが、眼ざゝれた犠牲(いけにへ)があなたてい事は間違つこなしだ。マアお樂みな事つてさア。

タナア　（サモ事々しく）ストレカー、君の望を遂げさせるぞ。

ストレカー　何の事です。

タナア　あの巴里ビスクラ間のレコードねえ。

ストレカー　（熱心に）えゝ。

タナア　あのレコードを破れよ。

ストレカー（大得意になりて）そりや本當ですか。

タナア　本當だ。

ストレカー　何時？。

タナア　今から。車の用意は出來てるか。

ストレカー　（少し萎れて）だつて眞逆——

タナア　（ストレカーに搆はず車に飛乘り）サア行かう。先づ銀行に行つて金を取つて。それから僕の家に行つて僕の鞄を取つて。それから君の家に行つて君の鞄を取つて。それから倫敦ドーヴア間、或は倫敦フォークストン間のレコードを破るんだ。それから海峽を渡つて、一氣呵成にマルセーユでも、ジブラルタルでも、ゼノアでも、何處でもいゝからアフリカに渡る港に駈けつける。そうしてマホメット教國に踏みこめば、女を避ける事が出來るといふものだ。

ストレカー　又そんな事で人を擔がうと思つて。

タナア　（決然として）それぢや殘つて居玉へ。君が行かなきや僕獨りで行かア。（其儘車を動かしはじめる。）

ストレカー　（追ひかけながら）オイ、旦那！チヨツト待つた！待つた！。（ストレカーがやつと車臺に攀ぢ登ると同時に、自動車が走り出す。）　（第二幕終）

▲譯者申す。『人と超人』も餘り長くなるので、こゝで一先づ中止にします。跡は第三、第四の二幕あるが、第三幕は恐ろしい六かしい夢の場で、普通芝居にはせぬそうです。それでそれはヌキにしても第四幕丈は此紙上に載せる積りでしたが、それも今は見合せます。いづれ遠からず一纏めにしたいと思つて居ります。

Miss (?) Kaneko,
May I ask your full name and address?
Your old uncle (allow me to say so)
Shihuroku.

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

イグノラント

榮

■僕のやうなホン駈出しの評論家、と云ふのもすさまじいが、兎も角も、漸く自分の書いたものが印刷されるやうになつた者にとつては、何によりも先づ人様の御評判が氣にかゝつて仕方がない。

然るに僕のやうなものゝ書いたのは、人樣の齒牙にもかゝるに足りないものと見えて、一向に御評判もして下さらない。甚だ小氣味の悪い譯である。惡口でもいゝ、何んとか御評判して下さるお方樣をほしい。と思つてゐると、六月號の『征服の事實』から七月號の『生の擴充』にかけて、そろ〳〵とおいでなすつた。

まことに有りがたいしあはせである。茲に謹しんでお禮を申しあげると共に、お禮ついでに少々僕の敬意をも容れて戴く事をお願ひする。

■帝國文學の『七月の文壇』にある山田檳榔氏の御評判はさすがに大日本帝國の最高學府たる大學の先生樣だけあつて、そのお偉い事只々恐入るの外はない。

『吾人を以て之を觀れば、征服的事實は近代文明の特徴でも何でもなく何れの時代にも免る可らざる事實である、而して征服的事實は實に生の眞相であるとも言へる。優勝劣敗、適者生存、斯うした力強い法則は生の根抵的法則(ダスグルンドリツヘゲゼツツ)であつて、之に對する憎惡とか反逆とかいふ事は、要するに、生の根本法則に盲目なるよりする若しくは曲解せるよりする愚かな笑止なそして憐れむべき言葉の遊戯である。』

『所謂國民教育の起源にして且つ基礎たる組織的瞞着』(近代思想六月號第四頁)のお役人製造場たる大學の先生樣方にとつては、尤も至極の御議論である。しかしこの反逆が果して言葉の遊戯であるか否かは、今に革命の赤旗があがる時に、どうぞ落付いて慄えないで見てゐて下さい。

『全體此論者は………個人我と社會我とのレラテイブ、ミイニング及び個人團體國家等の累關的意義に就いていかなる概念の取扱方(ベアルバイトウング、デスベグリツフエス)をなしつゝあるかゞ疑はしい。少くとも最近のゾチオロギツシユな、ポジテイフイステイツシユな、思想の發達のゥアグルンドなしに、現時の社會問題及び近代思想問題の考察をなすのでは不十分だ。』

僕の『征服の事實』の殆んど全部が、Ward著 Pure Sociology の一節をれぢこれたものである事も御存じないで、最近のゾチオロギツシユな、ポジテイフイステイツシユなもへちまもあつたものですかい。

『社會生活は動的有機的渾一的事實である。分節(グリイデルン)し、抽象(アブストラヒイレン)し、限劃(ベグレンチエン)して觀るのみでは、之を十分に解する事は出來ぬ。綜合し、大觀し以て相關的事實を闡明し、且つ史的變遷の脈絡を明白にしなくては、社會生活、社會思想の考察は到底不完全を免れぬ。』

いかにもその通りである。尤も先生樣のさう仰るのと、僕のさう云ふのとは或は意味に違ひがあるかも知れんが。

『此論者は、察するに、北歐及西歐の社會組織と日本のそれとの文明史的差異等には殆んどイグノラントなやうだ。民族的背景と國民的基調の上に渾成された文明史的歷史的社會我の眞實の聲と、縁もゆかりもない外の民族思想の附燒刄の自我觀念とは、何れを眞の自我の聲とすべきか。何れを根抵的な僞らない、眞の自我、眞の生の擴充とすべきか。論者は先づ、社會問題及思想問題の考究に於て、一層科學的哲學的素養を要する。而も論議をやるや、今少し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

論理的明快と徹底的憑據とを要する。』

如何にも僕は、北歐及西歐の社會組織と日本のそれとの文明史的差異は、たゞ日本のが餘程低度にあると云ふ事の外は、殆んどイグノラントである。又民族的背景、國民的基調、縁もゆかりもない外の民族思想の附燒刄、などゝ申す文字は、少なくとも先生樣の云ふ意味に於ては、僕には全く無意義のものに過ぎない。ハイハイ、科學的哲學的素養もはた論理的明快も、徹底的憑據も、せいぜい勉強な仕るでござらう。

最後に先生樣にお願いたしますが、僕は本號にも又、最近のゾチオロギッシュなホッテイフイステイッシュなウアグルンドのない、且つ縁もゆかりもない外の民族思想の附燒刄の、妙な評論を一つ書いてゐる。これにもどうぞ、僕達平民共にわかるやうなやさしい論調で、縁もゆかりもない外の民族の龜の子文字などは抜きにして、そしてノートのすき寫しなどは止しにして、ぜひとも御評判の程を願ひ上げ奉る。

■時事新聞に於ける中村星湖氏、讀賣新聞に於ける本間久雄氏の御評判に對しては、とり立てゝ申しあげる事もない。只本間氏の『精神界の勇者として自分は氏に滿腔の敬意を捧げる事を躊躇しない者である』などは、よしそれが眞面目にもせよ、おひやらかしにもせよ、又御世辭にもせよ、少々腹の立つ言葉である事だけを御承知願ひたい。又中村氏の物質的とか精神的とか云ふ御異見に對しては、本號の『鎖工場』の御一覽を願ひたい。尤もそこでもまだあまりはつきりした説明はしてないが。それから中村氏が次手に僕の問に答へられた項に就いては、一向に感心仕らぬ。僕の問は第一と第二とが主眼なので、第三問はたゞそれに附隨して起つたものに過ぎない。然るに氏は、たゞ最後の第三問にのみ答へてゐる。尤もそれだけで總てに答へたものと見れば見られぬ事もないが、さうとしては答があんまりぼんやり過ぎる。且つ僕は、失禮ながら、氏がそこまで氣のきいた御人ともお見受申す譯には參らぬ。

■最後に基督教はメソジスト派の雜誌、護教の『反逆か飛躍か』の筆者、田中純氏に對して少々の敬意を表して置きたい。

僕は僕の評論に對する諸家の御評判の中で、この文を最も喜んで讀んだものであるが、惜しむらくば氏はまだ、僕の論旨に對する理解が餘程足りないやうだ。

氏は『恁うした生の擴充、もしくば個人生命の發展はかの下層なる勞働階級の人々、もしくは婢僕階級の人々には無いものであらうか』と云つてゴルキーの多くの作物に出て來る所謂被征服階級の人物が横溢した生の孤獨なる力を有し、その『恐しい迄に擴充せられた生の一端に衝着せずには居られない』と説いてゐる。僕自身もこれには全く同感する。けれども要するにそれは、氏も云ふ如く、たゞわづかに生の一端に過ぎない。僕はこの『光輝あり力ある生の擴充』の一端に『感銘』し、又之あるが爲に勞働階級の將來にも希望を持つ事が出來るのであるが、只この事實を見たゞけで、彼等が被征服者でないと云ふ事は斷じて云へない。

猶氏に對しては、その御深切御丁寧なる御評判に對しても、大ぶお答へしなければならぬ事が多いのだが、甚だ失禮なる申分ながら、そして之は氏ばかりでなくどなた樣にも、もう一度さきの『生の擴充』と、こんどの『鎖工場』と、及び今後も續々書かんとするこの種の僕の論文との御熟讀を願ひたい。そして益々御評判の程を、重ねてひとへにおん願ひ奉る。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

八月の雜誌

寒

■早稻田文學　相馬御風氏が『生命力の靈感』といふ感想を書いてゐる。氏は樹木が天候の工合、季節の相違時刻の推移其他樣々な外界の變化に由て複雜な風姿の變化を生ずるを觀、そして遂に此の樹木の生命と氏自身の生命との間に、不可思議な渾融を直觀したのである。植物を組織する處の細胞はまた實に動物を形成する處の細胞と同一なる事は、テオドル・シワンが既に一八三八年に發見し、確立した科學的事實である。然るに氏は、生命といふものをこういふ意味に於て知つたのではなく、單に自已の意識に於てのみ認識せんとせるものゝ如く、『私は樹木と共に表情し樹木は私と共に呼吸したのである。而して最後に躍動し來つた何とも知れぬ嚴肅なる生命の意識に至つて、私の眼中もはや樹木と我との別なく全然ある一つの偉大な力に吸收され盡した事を記憶する』と云ひ、また『生命は只だ生命である、生命は只だ直觀に由てのみ把握する事の出來る神秘沈默な力である』云々と云つてゐる。由是觀之、氏の生命と稱する處のものはルイズ・ヂュマやレイルが説たバイタリズムに外ならぬらしく、吾々が理智に依て知り且つ科學的機械的に説明し得る事實を、氏は直觀と信仰とに由て『靈感』し、そして之に『神秘沈默の力』と云ひ、『嚴肅なる生命の意識』と云ふが如き神秘的な内容の曖昧な名前をくつ付て、竟に超自然的なバイタリズムに陷つて了つてゐる。『劇と詩』の『毒藥の壺』で、『制度や組織さへ改良すればそれで人間の生活が幸福になるやうに思つてゐる人々がある』なぞと、變な事を云つてゐるのも思ひ合すれば不思議でも無い。三上白夜氏の脚本『轢れし驛夫』は大變面白いと思つて讀んだが、目立つて拵へ過ぎてゐるのが瑕だつた。驛夫等が北村の通夜をし乍ら花を曳くのもおかしいし、北村の死を一味の同志が捕縛されたので覺悟の自殺としたのも、不自然な考へ難い事だ。終ひまで過失の死にした方が、寧ろ自然だつたらうに。

■青鞜　伊藤野枝子の『動搖』は、作の内容が示す事件よりは、寧ろ『新しい女』の戀愛觀若くは貞操觀を窺ふべき作として面白く讀んだ。チエルニシエフスキーが獄中に草した What to be done? は妻の戀愛に對する夫の側から自由戀愛觀を描いた物であるが、妻自身の戀愛觀や貞操觀は更に意義あり興味あるものであらねばならぬ。然るに『動搖』一篇が與へた解釋は、遂に『Tは私の全生活を肯定し同情しまた理解して吳れます、そして一緒に私共の道を開拓して吳れます、私の全体を自分の愛で包んで吳れます、ですから私は不便を感じません、強てTから離れる必要を感じません、たとへ木村氏が同樣に或は以上に私を遇して吳れるにしても今の場合私は自分がさまで必要を感じない限り私自身の内生活の上に動搖を與へるやうな事をしたくはない』と云ふ如きコンベンショナルな思想であつて、戀愛の自由といふ根本問題には些の觸れた處が無かつた。作者は親權に抗して自由結婚を遂げ乍ら他の男から戀された時は只管夫の氣色を窺ひつゝ終始如何にして避けやうといふ、消極的な態度のみを執つてゐる。

■三田文學　永井荷風氏の隨筆『厠の窓』は、獨り氏のみならず文學者と稱する者の大部分の思想を明白に現はして居る處が面白い。『心を改むるには先づ形よりするに如くは無い』と云ふ程氏はよく物が解つて居乍ら、猶且つ『自已を發揮する積極的の努力と、自已を無にして了ふ消極的の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

我慢とを比較するに、目下の處消極的我慢の方が遙かに容易にして便利である』云々と自己の卑怯を公言して恬として恥ぢない。その癖勞働者の手で社會革命が出來たら、いゝ氣になつてその恩澤に預からうと云ふのだらう。

■第三文明と劇場　創刊號である。『第三文明』――こゝの同人の語を借りて云へば『絶對的平均境』――といふ語の内容が一向判然しないが、巻頭の戯曲『溝の底』は此の雜誌の主義主張を最もよく現はしたものだそうだから、多大の期待をもつて讀んだ。山形だの、長州だの、三伊だの、大久羅だの、朝野だのいふ溝浚ひが、幸德公爵の第三妾宅の庭の花へ溝泥を投かけたといふので、署長が巡査を大勢連れて來て逮捕する。後には大久羅の妻子八人が脚氣衝心で死んだ夫や親の骸に取縋つて泣くといふ筋で、多少のサッジエッションは含まれてゐるが余りに不自然で誇張的なのに失望した。此の雜誌の同人には科學者や經濟學者が居て、何れも文壇に對する野心よりも却つて社會に興味を有して居るそうだから、一つ大に『空拳です、大陽です、毒藥です……』と云ふ表紙畵のやうな奇拔な物を見せて貰ひたい。

■とりで　演劇雜誌だ、挿畫なぞには却々コッたものがある。小説では邦枝完二氏の『捺印』が、ミヂメな書肆の手代と傲慢な文壇の大家との對照を描いて、そうもあらうかと思はせる處一寸皮肉な味のあるものである。

■白樺　今度は作物に面白いものが一つも無い。只だセザンヌ、ピンチ、ゴホ等の作畵の中から、男の後向の裸体畵のみを集めて、女の裸体畵で發賣禁止を命じた當局にカラカッて居る處が面白い。

■婦人評論　今月の雜誌の讀み物の中で、此の雜誌に出てゐる小野みち子の『我が日記』位ゐ烈しい感動を與へられたものは無い。『身内慄え、頭はしばるやうに痛む、些し休みて質屋に行き一圓借り歸りに米二升買ふ、代五十四錢也、少し買物して殘金三十八錢となる、忙しい財産哉『四つになる子が去歳の夏より只一枚の袖無しの色も褪せたるを着たる、いたましういぢらし。』『夜また例の處へ往き一圓五十錢借り歸途米二升買ふ、芋とパンのみにて此の夜を過させんことの余りに慘ましさやる方なくそばを取寄す、優子の嬉しがりて喰へるさまあゝ……』これその一二節である。世の中には怠惰の爲でも無く、愚鈍の爲めでも無く、不正直の爲でも無くして、猶且つこういふ悲慘な生活をしてゐる人間のある事を文士だの智識階級だのと大きなツラをしてゐるケダモノ共に見せてやりたい。

■中央公論　上司小劍氏の小説『水曜日の女』は、新潮へ出してゐる『膳』とゆき方を同じにしてゐる、女房の事も、子供の事も構はない、世間の事や他人の事には何の興味も起らない、只だ自分の事のみしか考へず器物だの電車で會ふ女だのに僅かに興味をつないで月日を送つて往く、一エゴイストの心もちを描いたものである。スネたやうな世間を馬鹿にしたやうなものだが猶ほ輕いユーモアと淡い皮肉とが、多少漂つてゐないでもない。

■正直な處を云ふと、いろ〳〵な雜誌に出る小説といふ者が、實に馬鹿々々しくて堪らない。見るだけでも不愉快な感がして、ヂリヂリ腹が立つて來る。批評なんかするのも馬鹿々々しい。それで今度は手當り次第に書いたのだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

大久保より

榮

■八月號の文章世界に生方敏郎の文壇暗流誌と云ふのがある。その『近代思想社の事業』と云ふ小みだしに當る最後の一文に云ふ。『坪内博士に切込みつゝある貝塚澁六氏、相馬御風君の「七死刑囚物語」を責めた大杉榮君、及び常に誰れかしらやつゝけ相に見える安成貞雄君、近代思想社は近來物凄い誤譯指摘派の淵叢となつた形である。大杉榮君の Tradictore traditore は紙面に表はれる前に大分の是正と添削とを受けて洗練せられたとの說もあるが、之等は讀賣新聞編輯の秘密に屬する事である。』

■僕はこの最後の是正とか添削とか洗練とか又は秘密とかの文字を見て持前のカンシヤク玉を破裂さして了つた。そして早速安成に生方の所番地を聞いて、朝起るとすぐ雜司ケ谷の彼れの家に出掛けた。

■『僕はけふ君に質問に來たんだ。いや質問と云ふよりは寧ろ詰問に來たんだ。』僕は座敷に通されるや否や、僕の物を云ふ時のくせの目をぱちくりさせながら、へたな返事をすりやすぐ樣ブン毆ぐるつもりで、あぐらの膝をつめ寄せた。

■先生なか／＼口がうまい。『いや、あれは決してそんな積りで書いたんぢやない。相馬が隨分ひどい誤譯をし、且つ君があんまりひどくそれをやつゝけたものだから、讀賣では、これでは相馬が可哀相だとあつて、大ぶあちこち君に削らした、と云ふ意味なんだ。實を云ふと僕は、あの暗流誌の中でも、こゝんとこは最もうまく最も皮肉に書いたつもりなんで、僕自ら甚だ得意にしてる所なんだ。實に意外だ。君からそんな抗議を申込まれやうとは夢にも思はなかつた。しかし、成程文章世界などの田舍者の讀者には、或は君の思つてるやうに正直にとるものもあるかも知れん。よろしい、次の文章世界で何んとか正誤をして置かう』と云ふ返事だつた。

■僕は、田舍者と僕とを結びつけた彼れの皮肉が、少々氣に入つた。そして先生が一生懸命になつて辯解してゐる、あのくさやの干物のやうな面付が、これ又少々氣に入つた。僕はとう／＼拳を解いて了つた。

■どうも僕は口では喧嘩が出來ない。と知りつゝも、やはり廻らぬ舌を無理やりに動かさうとするものだから、いつでもこんな風に瞞されて了うんだ。奴はきつと、もし相馬が奴の云ふやうな意味に、即ち都ぶりにあの文をとつて、そして僕と同じやうに詰問にでも來やうものなら、いやあれはさうぢやない、大杉の野郎が小生意氣な事をぬかしやがるものだから、ちよつと中傷してやつたんだ、位の事を云ふに違いない。にくらしい奴だが、一旦解いた拳は、もう容易に堅くならない。

■それから生方の所で晝飯のご馳走になつて、先生の案内で、すぐ近所の相馬御風を訪ふた。小川未明の所へ行つて留守だと云ふ。ひつかへして、これ又すぐ近所の、小川未明を訪ふ。相馬もゐる。人見東明もゐる。將棊の合戰の最中だ。

■八月號のウチの雜誌にあつた小劍の『寂しき家より』が先づ話題となつて、未明は小劍の味方を了る、相馬と人見とは散々に小劍をやつゝける。僕も亦そのシリ馬に乘る。僕は未明と云ふ人には始めて會つたのだが、その頗る眞面目なしかし激越な、心の底から湧いて出るやうな感情の聲を聞いて、ちよつと寒村を思ひだした。相馬も『いや、全くさうですよ』と同感してゐた。人見と云ふ人もなか／＼話す人だ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

■生方は默つて皆んなの議論を聞いてゐたが、やがて僕が『實は、けふは生方君の所へ大いに詰問に來たのです』と云つたのがキッカケになつて、皆んなの鋒先は一轉して生方に向つた。生方先生の弱り方と云つたらお話にならない。『僕も、もうあんな暗流誌なんかは止すつもりだ』などゝへコたれて了ふ。それから星だの方角だのと云ふ妙な話になつた。未明なんかは本當にこんな事を氣にしてゐるらしい。

■その後三四日して、生方から『虫けらの心』と題した原稿を送つて來た。いかにも虫けらの心めいたものだが、近代思想社の事業は誤譯指摘ばかりぢやない、たまにはこう云ふ結構なものも載ろ、と云ふ證據の爲めに、甚だ惜しいながらも一頁半を割いて上げる。

■センヂリカリスム研究會は、神田のあるミルクホールの二階を借りてやつてゐたのだが、とう〳〵八月の始めに例の邪寬がはいつた。何んでもそこの主人を呼びつけて、明晩も若し貸すやうなら、お前は今から檢束して了ふ、そしてこれからウンとお前の商賣の邪寬をしてやる、と云ふごたくだつたさうだ。しかし會はやはり續けてゐる。こんどの所なら、奴等がふんごんで來て會の解散を命じるまでは大丈夫だ。

■土岐哀果は九月一日から『生活と藝術』と題する月刊雜誌を出す。初號には堺も書いた、寒村も書いた。安成二郎も書いた。僕は次號に何にか書く。土岐が讀賣新聞の編輯局でその編輯をやつてゐると、誰れかそばからのぞいて、何んだまるで近代思想の臨時號ぢやないか、とひやかしたさうだ。親類が一つ出來たやうなものだ。本誌の讀者諸君の御愛顧を乞ふ。

■臨時號と云へば、十月は本誌の一週年になるのだから、何にかの景氣づけをやつて見たいとも思つてゐるが、金の方の相談がまだきまらぬので、何んとも豫告をいたしかねる。多分は十月號もやはりいつもの見すぼらしい姿で出る事だらうと思ふ。

■尤も、若し金が出來れば、本社の經營は一切堀保子に任して、僕等はたゞの編輯人となり、而して堀保子は、大いに牛を賣り損ふべく、その辣腕？をふるつて、何等かの仕事を始める筈だ。

■寒村が本號に譯す筈であつた『婦人解放の悲劇』は、青鞜社の方でも九月號に出すさうだからお讓りする事にした。

讀者諸君に

■本誌を創める時、半年も續けばいゝがと思つてゐた處が、如何やらこうやら本號を以て滿一年に達した。不思議とも思ひまた嬉しいとも思つてゐる。然し、讀者諸君も既に御承知の如く、各地警察の不法な干涉が激しい爲めに、一年分の前金切れと同時に、購讀を中止される向も尠くあるまいと思ふ。若しそうなれば、判然とそう云ひ越して戴きたい。そうでないと、雜誌の發送を續くべきか、中止すべきか分らない爲に非常に迷惑を感ずるから。

■また、依然購讀を續けらるゝ考へであつて、且つ恰ど前金切となり、若くは既に前金切となつてゐる向は、此際至急前金を拂ひ込んで戴きたい。本社の經濟には、少しの余裕も無いといふ事を、どうか吳々も御承知を願ひたい。

■警察の干涉は脅しである。此方が強くさへ出れば凹んで了ふ脅しである。こんな脅しに怖ぢず、相變らず愛讀を願ひたい。讀者の紹介も願ひたい。そして更に本誌の繼續に盡力して戴きたい。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

■寄贈雜誌■

馬上大學
内外教育評論
とりで
帝國文學
モザイク
新佛教
東京魁新聞
新東京
野の聲
村落通信
鑛業及鑛夫
第三文明と劇場
圖書評論
現代詩文
劇と詩

實業之世界
婦人評論
護教
凍野
新潮
人生と表現
白樺
大國民
ニコ〱
青鞜
獨立評論
銀磬
ダイヤモンド
ナショナル
新文林

■八月號目次■

むだ花（感想）……………榮
夢の娘（評論）……………荒畑寒村
唯物史觀に就て（紹介）……………小原愼三
蟻（詩）……………土岐哀果
味噌汁（詩）……………安成二郎
寂しき家より（感想）……………上司小劍
少しづゝ（詩）……………德永保之助
人間屠殺所（紹介）……………佐藤緑葉
悲鳴（小說）……………和氣律次郎
人と超人（脚本）……………堺利彥

■本社取次書籍■

本社に於て次の新書を推奬し、取次販賣をする。御注文は成るべく振替貯金によられたい。價は定價通り、郵稅は當方もち。

▲不平なく（土岐哀果著 金二十五錢）
▲生靈（正宗白鳥著 金一圓）
▲罪と罰（内田魯庵譯 金二圓四十錢）
▲生命論（永井潜著 金二圓五十錢）
▲現代思潮十講（桑木嚴翼著 金一圓）
▲思想問題（上田敏著 金一圓三十錢）
▲啄木遺稿（石川啄木著 金九十錢）
▲煙（ツルゲネフ作 大貫晶川譯 金一圓）
▲武器と人（市川又彥譯 金六十錢）
▲人形の家（イブセン作 島村抱月譯 金九十錢）

■定價一册金十錢、半年分前金五十五錢、一年分前金一圓。但し外國は別に一册金二錢宛の郵稅を要す。
■郵劵代用は五厘切手に限る。但し一割增の事。
■廣告料特別一頁十五圓、普通十圓。
■本社振替貯金番號一七一六三。

大正二年八月三十日印刷納本
大正二年九月一日發行

府下大久保百人町三五二
近代思想社内
編輯兼發行人　大杉榮

府下大久保百人町三五二
印刷人　荒畑勝三

京橋區銀座四丁目一番地
印刷所　敎文館印刷所

大賣捌所　東京堂、上田屋、東海堂、北隆館

地六社復刻版

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

…創刊雜誌…

▲藝術と實生活とを渾一せしめんとする努力▼

生活と藝術

九月一日發行
第一卷第一號

定價一冊十五錢
郵税二錢
六ヶ月分九十錢
一ヶ年分一圓八十錢

われらの藝術……哀果
新秋の劇壇(評論)……仲木貞一
孤獨の自我と評論……長谷川天溪
英國で見た(評論)モンナ・ヴンナ……市川又彥
逃避者(小說)……荒畑寒村
朝鮮(歌)……土岐哀果
漁村小情(歌)……西村陽吉
七月廿三日(歌)……齋藤茂吉
いやしき夢(歌)……安成二郎
箒(歌)……大熊信行
我昔所造(詩)……杉村楚人冠

生活と藝術と建築……黑田鵬心
スクリャビンの藝術……仲田勝之助
病室より……故石川啄木
小劍が百二十斤になつた時……堺利彥
謚六さん……上司小劍
歌……高山辰三　春町逵
和田信義　飯山津淚男
伊東壽一　雨角七美雄
都會詩人　高橋德太郎
若き商人の日記……陽吉
都市居住者の手帳……哀果生
消息……

發行所　東京市日本橋區檜物町九番地　振替東京五六一四〇　電本一八一七　東雲堂

會員 藝術座 募集

■來る九月十九日より同二十八日迄■

■十日間有樂座に於て第一回上演をなす■

第一回上演

メーテルリンク作　秋田雨雀譯
「內部」一幕

メーテルリンク作　島村抱月譯
「モンナ・ヴンナ」三幕

■藝術同好者間に廣く會員を募集す■

■入會希望者は二錢郵券封入の上■

■申込まれなば規則書を送る■

…(登場技藝員)…

松井須磨子
酒井よね子

武田正憲
倉橋仙太郎
小野益太郎
澤田正二郎
鎌野誠一
高濱敏樹
淺井房次
宮島文雄
笹本甲午
其他男女技藝員數名

東京市牛込區西五軒町清風亭內
「藝術座」假事務所
電話番町四五七六

■池田藤四郎譯編■

森村市左衛門、福澤桃介、藤原銀次郎、西野惠之助、若宮卯之助諸氏序文

譯編者緒言の一節

サイエンテイフイツク、マネヂメント……此革命的新法は、經濟界は固より政治界、軍事界、其他百般の仕事の上に數多の無駄を省き、より少き金と、より少き人間と、より少き時間とを以て、より以上の生産を得せしめんとするにある。書中記す所のものはサイエンテイフイツク、マネヂメントの如何なるものかを小説体に綴つたもので何人に對しても尠なからぬ興味を與ふる事と信ずる。

經濟界の革命

無益の手數を省く秘訣　既刊

千部以上の注文先

三菱合資會社の二萬部、川崎造船所の一萬四千部を始め、鐘淵紡績、王子製紙、入山採炭、大日本製糖、石川島造船所、箕面有馬電氣軌道、北濱銀行、藤田組、帝國冷藏、芝浦製作所、東洋モスリン、日清紡績、日本郵船、三井物産、名古屋電燈、大阪窯業、三越吳服店等。

定價一部十錢、百部十圓、千部百圓、一萬部千圓（割引なし）

東京京橋區木挽町六の五
ナシヨナル社
振替口座東京二四八九一

眞に我子を愛する兩親

▲教育の方法に依ては如何なる低能兒も常人並に智識が發達するものです、然らば在來の教育法に依る常人の立場が問題になるのです、其處で此モンテソリイの新教育法は其常人に對する教育の標準を高めやうとする破天荒の計畫であります。

▲在來の教育法は、折角發達せんとする人間の肝腎な機能を成可く働かせまいとして居ます、從て白痴は一生白痴で世を終り、常人は其本性を充分發達させずに、所謂生半可で滿足する譯であります。

教育界の奇蹟

モンテソリイの新教育法　近刊

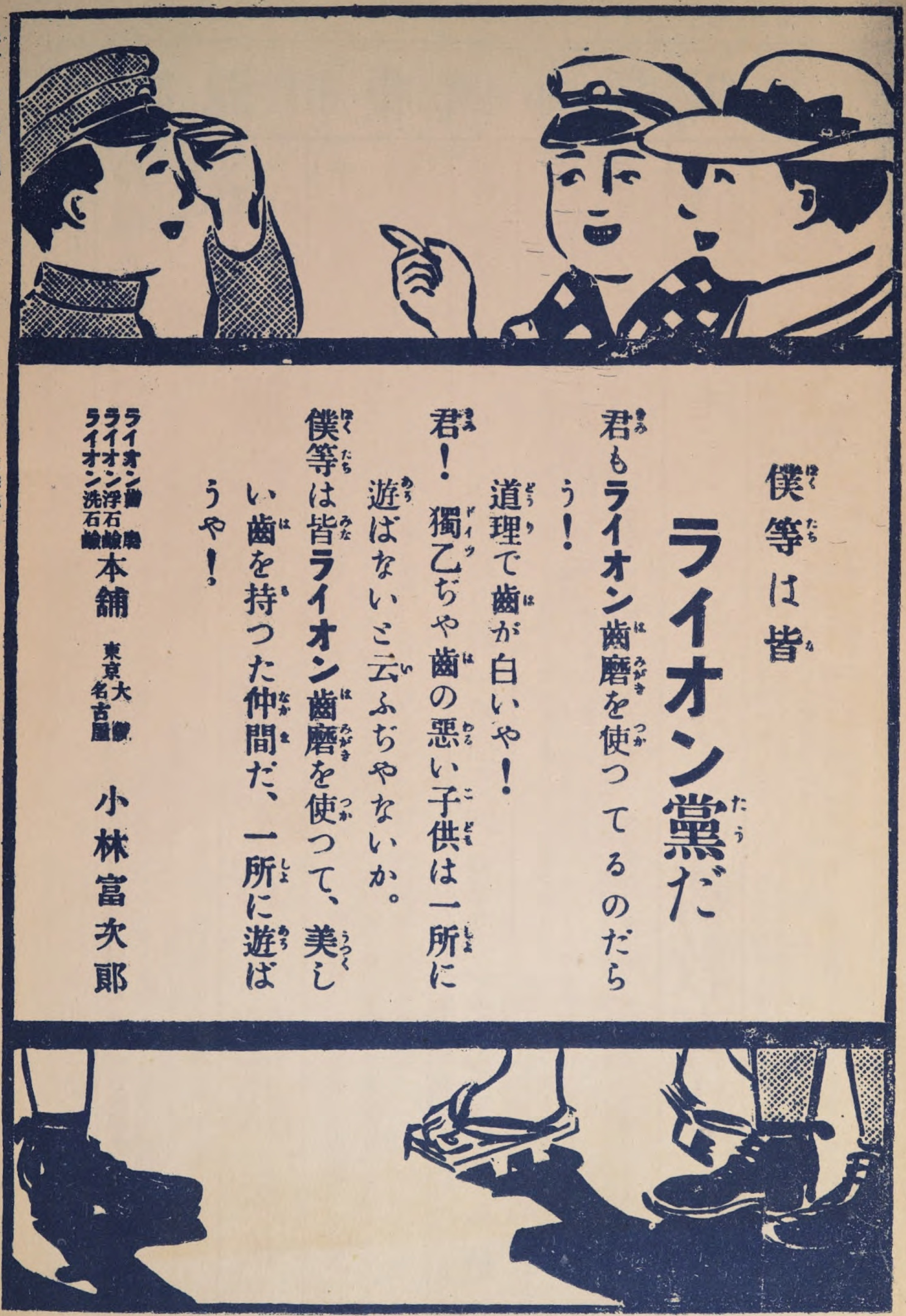
不良少年を恐るゝ兩親

▲處が此新教育法は人間の能力を精一杯に發揮して、何等の苦痛も面倒もなく、七歳までの可愛らしい人間の卵を、一人前に仕立て上ようと言ふ、驚く可き方法であります。

▲既に雜誌『ナショナル』に連載して大好評を博したものを、近く一冊に纒め、廣く日本の御兩親に御裾分けしたいと思ひます。御子さん達の一日か二日の御小遣にしか當らぬ僅か金十錢で、御子さんの一生涯の基礎をお築きになる事が出來ます。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

近代思想 第一巻第十二號
大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一日發行）
大正二年八月三十日印刷納本（大正二年九月一日發行）
九月號
金十錢



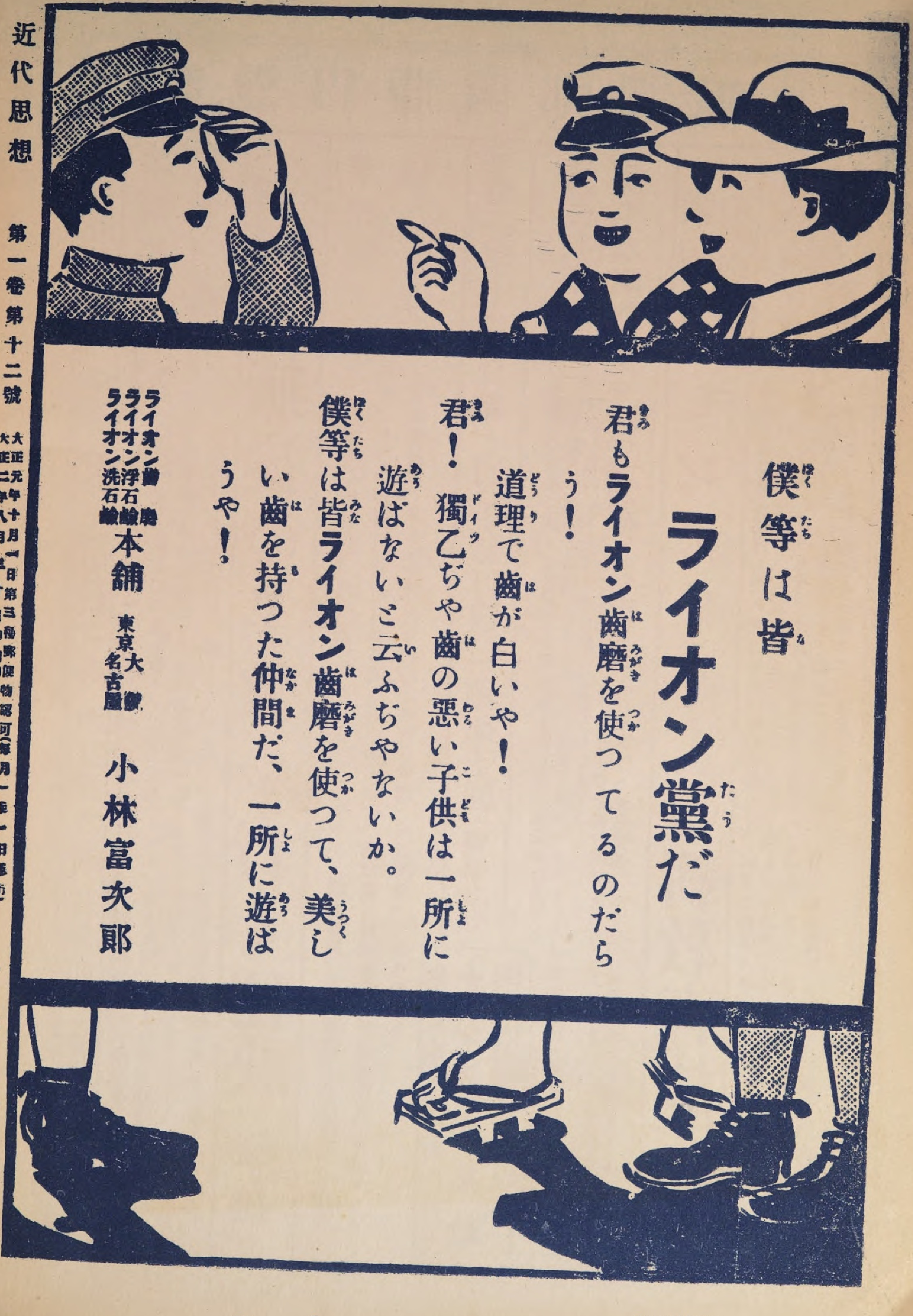
Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

（大正二年九月一日發行）

九月號

金十錢

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN



近代思想 第一巻第十二號
大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正二年八月三十日印刷納本（大正二年九月一日發行）
九月號
金十錢